

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5

始

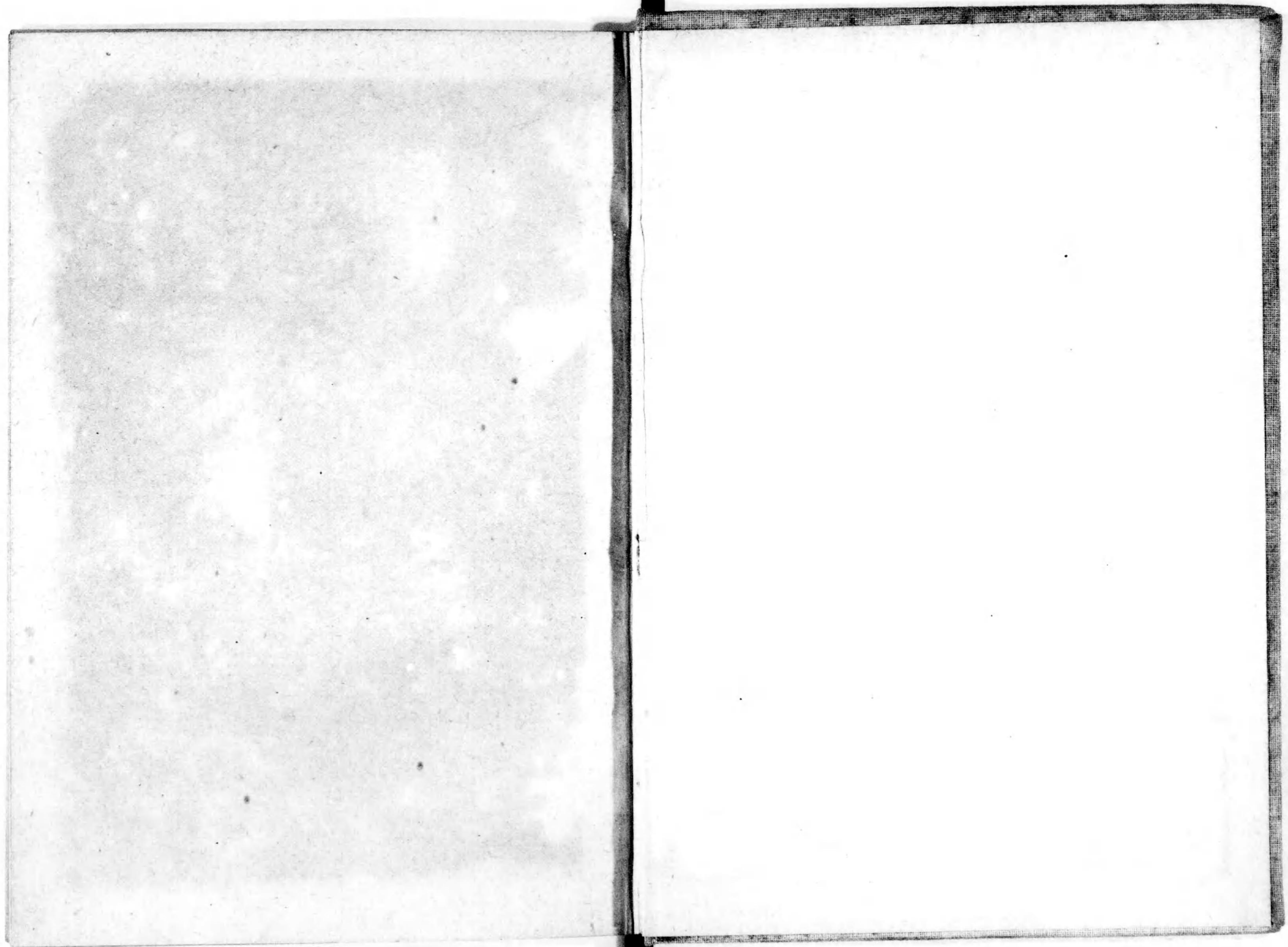


3

あらうき

海部





奥野他見男氏著



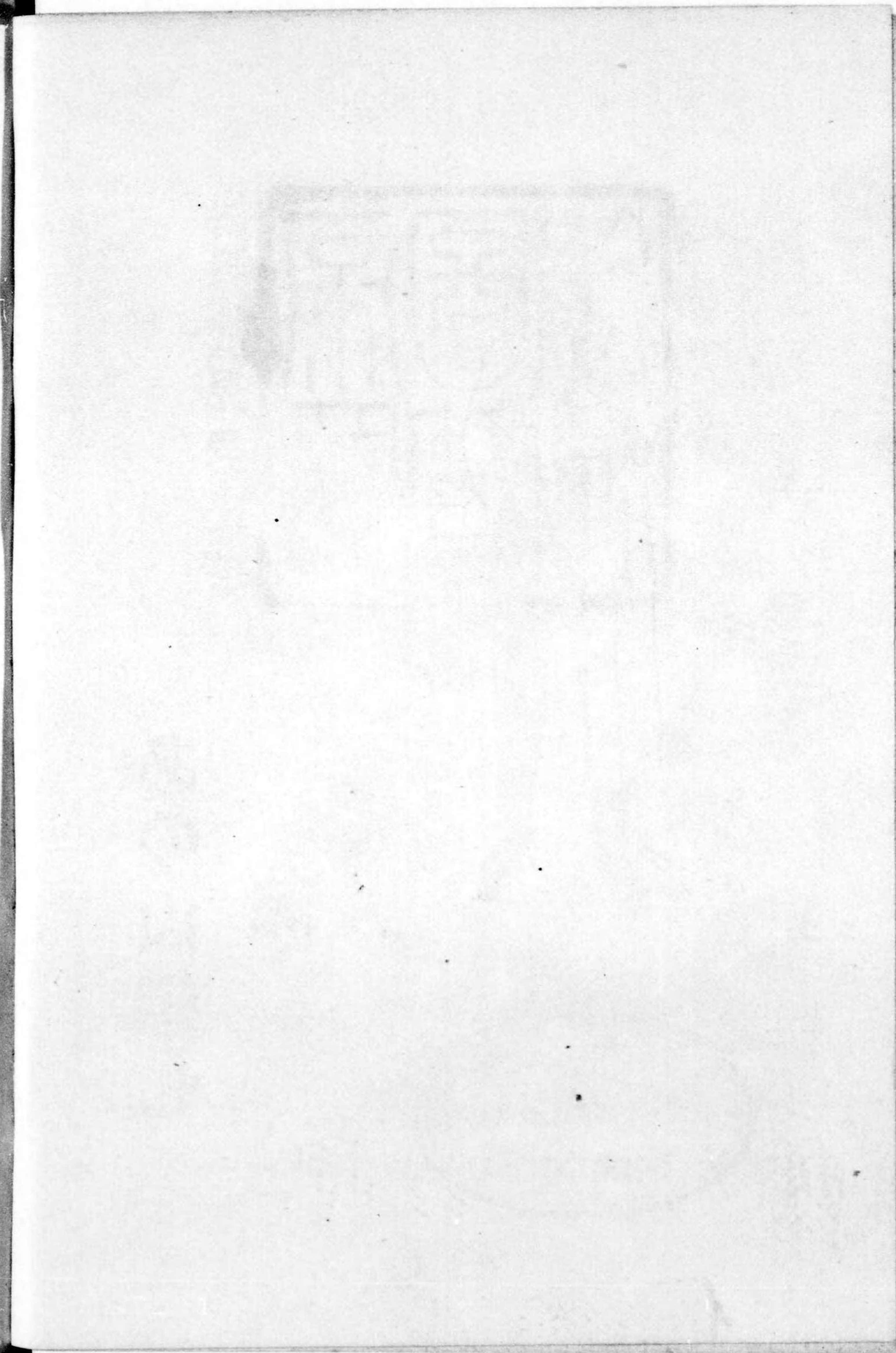
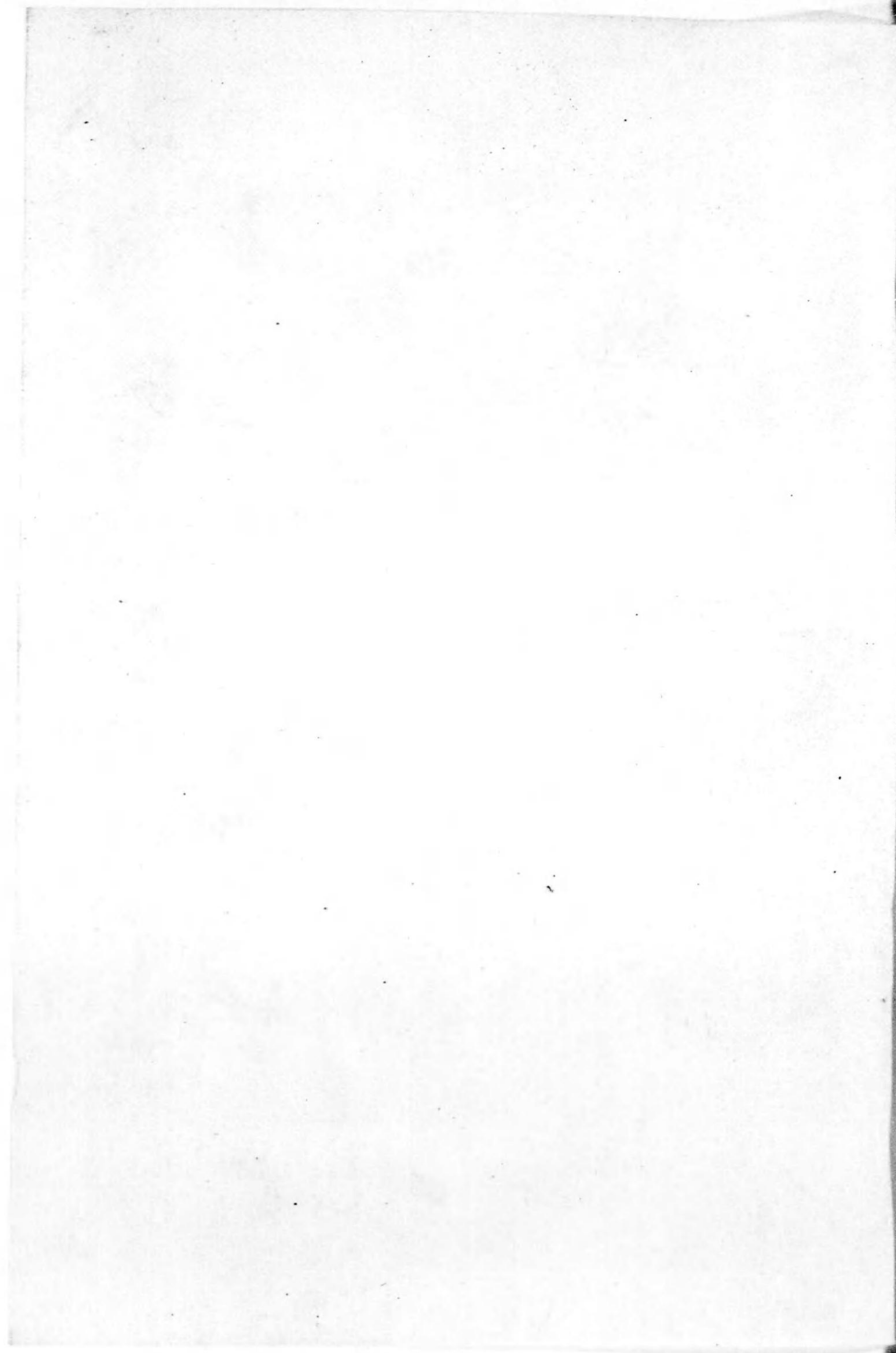
著者の旅装

あの山戀し

海戀し

大正  
6. 5. 31  
内交

誠實堂



特101  
443



(画伯畫治博川津) 嶋大の椿

あの山戀し海戀し

目次

大<sup>オホ</sup>島<sup>シマ</sup>.....一

詩<sup>シ</sup>の島<sup>シマ</sup>

戀<sup>コイ</sup>の島<sup>シマ</sup>

さらば大島乙女よ

詩<sup>シ</sup>の伊香保<sup>イカホ</sup>.....七五

新<sup>シン</sup>婚<sup>コン</sup>族<sup>リヤカウ</sup>行<sup>カウ</sup>

榛<sup>ハル</sup>名<sup>ナ</sup>湖<sup>コ</sup>へ

いざ観<sup>カン</sup>想<sup>ソウ</sup>せよ

伊豆伊東<sup>イヅイトウ</sup>.....二六

涙<sup>ナミダ</sup>のにじむロマンス

熱海  
伊豆山

飛驒の山水……………一三五

神通川上流の景趣

四方みな山

焼ヶ岳登山……………一五六

上高地

裸の道中

日本アオノ山下の老獵師……………一六五

功名談

凄い夏の月

再遊の飛驒……………一七三

鑛山の中へ

可愛い嬢ちゃん

日本アオノ高地まで……………一九六

浅間温泉

穂高の霊峯

赤城山上湖畔の一夏……………二二三

紅の一点

暴風雨のあと

湖畔の周遊

都より曾駒ヶ岳へ……………二九九

豪壯な山容

神秘的な感

伊那小屋にて……………三〇八

高山植物の数々

天界の夕暮

箱乙女峠を越えて……………三一九

高原の老鶯

死生の境

蟬時雨

思出のエピソード

湖南へ

日光より中禪寺へ……………三六六

華嚴の瀧の壯観

中禪寺湖の月夜



大崎千ヶ崎沖



# あの山戀し海戀し

奥野他見男著

## ◎大島

此の旅行は去年から思ひ立つてゐた、先づ八丈島へ渡つて詩趣を養ひ、續いて大島へ戻り大島より伊豆へ廻つて熱海伊東の温泉に旅情を浸し、箱根の幽雅にうつとり朗かな気分になり、一度び歸京して日光は中禪寺の湖水にボートを浮べて俗腸を洗ひ、更に機あらば木曾の山川に瞑目自然に合致したのであつた、此の企てが果して豫定通りに進行すれば此の上なしである。

先づ何はさておき音に聴く八丈島へ行かねば氣が済まぬ。八丈島!! 如何に遊子の胸を唆る叫びではないか、「鳥も通はぬ八丈島よ!」と歌ふ聲を耳にする度に、身體中へ浸み込む様ななつかしみと詩情を感じる。僕の旅行は第一に此の八丈島から始めようと思ふた、所が豫定の第一歩からして思ふ通りにゆかぬ、と云ふのは誰れとは無しに八丈島通ひの船は今修繕中であつて何時出るか解らないと云ふ心細い話。モ一つは八丈島は大分内地の風を帯びてゐて何んの異情も無い、それよりか大島は東京にこそ近かれ、國土風俗全つきりいみじき許り變つてゐる、僕は同じ行くんだつたら八丈より大島を君に進めると切なる友人の勸告があつたりするので、今まで八丈島

へ行かなくちや旅行記の第一頁を飾られぬ様に思ふてゐた僕の氣が次第に遠かつて殆んで放擲つてあつた大島に慌て、注意の眼を拂ふ様になつた。

成程地圖を見ると東京灣をフイと出たばかりの所に大島がある、なんだ餘り近いぢやないかとけなしても見た、此麼近距離の所が土地風俗が變つてゐるのかと不審の小首も傾けて見た。翻つて八丈島を探ると可成の距離である。八丈島へ、八丈島へと云つて見ると如何にも旅情がしみくと迫まつて來るが、大島へくぢや旅情所か島流しの様な氣になる、八丈島! 實にいゝ名だ、大島へ! 實にいゝやな名だ、僕はその氣の乗らぬ大島へ旅立たうとするのである。雖

然強ひて大島へ行かなくちや人間旅を語るに足らずと云ふ氣を起して無理に詩情を呼び起す。さうなつて來ると悪くもない、次第に八丈と大島がビタリと同化した様に思はれ、同時に大島の風俗習慣が八丈島へ乗り移つた様な氣になつた、と同時に僕のあたまが八丈が大島か大島が八丈かムカ／＼になつて來た、斯うなりやべめたものさ。大體が變つた空氣に觸れたいんだもの、名こそよけれ八丈島へ都の風が傳播してゐちや二束三文の價もない、名こそ悪しけれ大島は聴くもの見るものアツとするんてだから實際の旅情は正にそれ大島にあるんだ、だから八丈島と云ふ名だけ一寸臨時拜借して大島へ附着けば同なじことさ、そこに始めて空想と想像に畫かれ

たる所謂八丈島が形式されるのである。だから僕は八丈島の大島へ行くのである。理が非でも斯うしなくちや向ッ腹が承知せぬ。

先づ計畫は之で定つて愈々大島行きに斷然決定する。

僕は何日何時に出發すると云ふことを定めることの大厭ひな男だ、フイと氣乗りさへすればフイと飛出すの方、然し今度は計畫が平常と違つて割合に大規模だから小々は豫め用意しておかねばならぬ、その上でゆる／＼氣分の興奮を待つに如くはない。

先づ三越へ行つて小さい旅行鞆を求め、己れは之れまで旅行好きな癖に鞆を持つてゐなかつた、持ちたいことは山々だつただけれど要するに其れだけの餘裕が無かつたのだ、今度こそはと思ひ切

つて破天荒の快舉をやらかした。それ丈け喜びも非常なものであつた。それに夥だしい原稿用紙と、靴墨と剃刀と齒みがき楊子とインクと空氣枕と旅行案内の一冊とカーラの新らしいのと振ぢ込んでおいて、さて何時なりとも御座いとばかり、徐ろに時を待つた。

儲明日こそは出發だ、何時までも愚圖々々して居られぬからと折角臍を堅めて悉皆上機嫌に收まつてゐたのが生憎當日は大雨滂沱と云ふ張り飛ばして遣りたい様な天氣、同じ行くのに雨の日を目がけて出かける奴があるか馬鹿野郎と自分を馬鹿呼ばりしてオヂヤンにして了ふ。今度こそはと又次の日を待つ、すると東北大學の某氏から近々の裡に洋行するので是非上京してお目にかゝるからなど、

邪魔をする、洋行するのだから當分逢はれもしないだらうからと其の日も駄目、それが幾日に上京すると書いてあつたら宜かつたんだけど明記して無かつたので如何にも頼りのない話、一層思ひ切つて旅立てばいゝのだけど僕がその上京を知つて逃げ出したと思はれても詮ない話、それが爲めにズル／＼と日が何日の間にやら経過して了つた。

大島行きおほしまゆの汽船は靈岸島れいがんじまから出るので一三五八の日に出帆するのである。己れは某氏の爲めに五の日と八の日の二回をフイにして了つた。さて甕かて來るものは來たり、去るものは去つたのでも安心だ、十一日には是非萬難を排しても立たなくちやと思ふてゐると、

又も犬丸君の結婚問題が存外進行して稍もすれば月の裡に式を上げ兼ねまじき勢、それには強つて出席の義務があるので南無三寶と思ふてゐる所へ、今度は又臺灣から従兄の山田夫婦が上京するから御厄介に預かりたいなど、云つて来る、漸次事が面倒だ、愚圖ついでゐると又ドンな事が降つて来るかも知れない、理が非でもモウ出發だと思ひ切つて旅立つことにした、それもワイ／＼出發日を吹聴して出かけるとしたら事が七面倒とあつて、密つそり博文館の竹貫氏と、關係の書肆東文堂御主人に丈けお暇して後は野となれ山となれを極め込んだ。

出發間際になつて妻と詰らぬ事で喧嘩をオツ始めた、で平常なら

ば「早く歸へつて頂戴よ」と手を握られるんだけど、互に激憤の涙で「左様なら」一ツ云はずに睨合ひで別れると云ふ仕抹、なんのこつた、これはムツとした顔で電車に乗る。

一體己れは皆目今度の旅行に關する智識が無かつた、汽船は何處にあるのやら、何と云ふ會社やら、旅費が孰れ丈け入るのやら全く盲目滅法であつたのだ、漸くにして東京灣汽船會社と知り、電話帳を調べて京橋一八〇番を探り、出帆時日を聞き合はして漸つとのことで薄すら臈ろ中に少し摺むことを得た様な仕抹で、その時始めて一三五八の日を知り、同時に右は午後八時半に出帆するに定まつてゐる事も知り得た譯である。

電車から下ろされて東京灣汽船會社は？と訊ねると直ぐ側を指さされた、右に折れて真直に突き常ればと教へられた通り行くと、成程見つかると。「東京灣汽船會社待合所」と書いてあるので入つて行く」と如何にも汚ない、先年僕が大阪商船の待合室を見たことがある、それと比べて、なんだ此の様はとムーツとした、そして其處に待合せてゐる客と客の顔を覗いたが、どの面見ても碌な顔てありやしな、それ等が大島へ皆廢心さすんだと思ふと大島が如何にも汚ない島の様に想像される、詩の島戀の島あゝ大島へ、大島へと夢の様な空想を書いてゐた頭の中がウンザリした。

唯一人自分の如きセビロの洋服をきたのが見附かる、八字髯もあ

る、此奴だけだらう僕と同じく二等で行くのはとチロリと見る、向ふも又チロリと見る、矢張り己れを目して二等面と合點したんだらう、癩に障る面構へだけど若しやあとで名乗りを上げ合つた曉にはと名刺を取出して職業をペンで認め入れる。

時間を見ると未だ一時間半も餘裕がある、僕は疊張りの長椅子にグナリと腰を下ろしながら妻と喧嘩して旅立ちするんぢや無かつたと後悔して見たり、妻は僕に濟まなかつたと思ひヒョツとすれば急にやつて来るかも知れないと思ふて、立上がつてキヨロくして見たりした、さう思ふと誰れか見送りに来る様に思ふ、ウンさうだ、東文堂御主人が今日の出發を知つてゐて今朝訪ねて來られた際に大

島にゐる知己を知らせて呉れたが、生憎住所を失念したので、それを後程電話で知らすとのことであつたが、電話がかゝつて來なかつたのに依つて察すると、或は見えるかも知れない、それは當途のな話だけど、何んだか待ち懸れて、至で堅い約束でもしてあつたかの様に一人一人を物色したが、遂にそれらしき風體も認められなかつた、仕事がなかつたので二等切符（二等二圓卅九錢、三等一圓五拾何錢）を買ひ求め、「大島行きは早くお乗り下さい」と喚めかれる音聲に唆かされて急いで解舟にヒラリと身を投げ入れる。

今し解舟が出ようと動き始めてる所へ、御主人がアタフタ飛んで來る。はしけへ足を踏み入れるトタンに舟はスーッと出る、もう一

秒遅れたら間に合はなかつたんだにと共々によかつたくとよろこぶ。

解舟には旅客が一抔であつた、よろめく者、珍らしさうに四邊を眺むるもの、本船はどれだらうと眼探りする者、四邊の夜景に恍惚するもの、様々であつた。洵に僕も永く東京に住んでゐて未だ此の光景、此の夜趣を知らなかつた、晝見れば見るもの悉く汚ない筈の河の流れ、水のうねりが夜になると斯くも美しく扮装されるのであらうか、水面に寫る煌々の光りは又とない美はしい、遙か永代橋上を走る電車は一團の火光を載せてゐるかの様にキラキラする、あらゆる電燈の光りは總ての汚濁を包んで美の外には何物も見せつけま

いと輝いてゐる。なんだか日本と云ふ感じが薄らいでチームス河畔にある様な、否外國の港に着いた様な微妙な感じである。

「全で外國へ行つた様な氣がしますね」と、御主人が云ふ、矢張り己れのみ之感想でなかつたと得意げに微笑する。

解舟から本船へドヤ／＼と登ると、直ぐ火魂ましい汽笛で早くも動き出す、僕は何時でもよく新聞や雑誌で甲板に倚りかゝつてハンケチを振つて見送人と別れを惜しむ人の寫眞を見た、一度彼廢氣持ちになつて見たいと始終思ひ詰めてゐた矢先さだから茲ぞとばかり帽子をふつて大に洋行下準備を發揮する。

「御大事に」と微かに傳はつた最後の言葉を耳朶に受けて、二等の船室に入る。見ると僕と合はせて三名、六疊敷き程の室に互はゴロリとする。「貴方も大島へ？」と言葉をかけられたのを機會に三人は早くも急造知合になる、聽いて見ると一人は大島が始めて一人は大島に住む御役人さまと解つた。

お役人さまは色んな大島の話をかかせた。

「大島は以前は戀の島と云つて乙な名が附いてゐたものですが、今日にはもう大に面目を改めました、けれども内地で私娼撲滅をしたお蔭でドヤ／＼と澤山新たに入り込んで來ましたが跋扈もしません、彼廢者は何處へ行つても片身の狭いものと見えますね。」



大島の女ですか？そりや諄撲なものです、恰んど絶對に眞面目な  
 ものですよ、ローマンスなんてありませんよ。そりや千人に一人位  
 は其れも何うですすかな。大體内地人に顔を見られるのを厭がりま  
 す、隠れる様に／＼としてゐますね、大低はまあ牛を飼つてゐます、  
 仲々働きますよ、ですから男は比較的仕事も仕ないで遊んでゐます  
 よ、我々も然らあつたら結構ですナ、ハツ／＼」と高らかに笑つ  
 て、今度は此方の問ひに任せて眞面目に移り、

「此の船ですか高砂丸と云ふんです、一六五噸でしたと思ひます。  
 大島の人間は今では全般を通じて米を喰つてゐますね、昔は麥七  
 分と云つてましたけれど、大島も一寸奢つて來ましたよ。島には村

が五ツもあります、岡田元村と云ふのが大きい方です、船は岡田  
 へも元村へも行きますが、なんと云つても元村が大島の首府ですか  
 ら大低は元村で下ります、特別の用のない限りは。旅館は三浦屋と  
 云ふのが一等大きいんです、宿泊料も安いんですよ、普通先づ七拾  
 五錢位ですナ、極上々と云つても壹圓貳拾錢位で知れたものです。」  
 と、流石に島の御役人さま丈けあつて詳しい。

「茶代なんか貰ふものだと思ふてゐませんよ、その心配が入らぬか  
 ら樂なものです、女中に對してもさうです、強ひておけばホンの僅  
 かですね、まあお止しなすつたらいゝでせう」と餘計な忠告迄與へ  
 てくれる、實際旅をして茶代を孰れ丈けおけばいゝかと云ふ事が一

番頭を痛める問題だ、假令宿賃が幾程高くても見當の附かない茶代の心配が何よりも厭である、で自分は今度の旅でも旅行案内の廣告を見て茶代廢止の家ばかりを探さうと思ふてゐる、その方が吞氣だもの大島はその點は先づ氣樂でいゝ。

御役人さまのお蔭で僅かに大島が解つて來た。

何時しか船は河口を離れたらしい、少しく動搖し始めて來たが微なるに過ぎぬ、右に品川、左に洲崎の電煙がモ大分遙かになつて來た。横濱に立寄るのかと訊いたら寄らぬとある。それでは起きてゐる甲斐がないと許りウツトリして横はる。僕は斯う思ふてゐた、寢具(毛布)は勿論、枕までも船の方で用意して呉れるんだらうからと

其の積りで出て來たんだ、それだに船では一切其廢事はお構ひなしとのこと、汽車の中と少つとも變らぬ、變つてゐるのはお茶を呑まして呉れたのと、トタン製の頑丈な丸い煙草盆を持つて來たこと許りだ、僕は是初それを見た時船に弱い人の嘔吐の爲めに用意されてあるものだと思ふてゐた。勿論灰もなければ火もない、だから嘔吐の際にも兼用するんであらう。

滅切り斯うなると寒い、此廢事なら毛布の一枚でも用意するんだつたにと痛切に悔む。眠られぬまゝにブルブル震へながら甲板に立つ、明るい燈火の連なりは町であらう、わけなく美しい、晝の景色もさこそならむも夜の眺めも亦一入である。右手に當つて觀音岬

の燈臺が燦として青白い光りを投げてる、續いて眞黒に三浦半島が月の光で容易く空の色と區劃を示して、うねつてゐる。赤い燈、青い燈は皆船のともしびであらう、次第に近づき次第に離れ行く。

「西川さん、大島が見えますよ」

と、云はれて一度び船室に縮込めた身體を又も曝らす。

「それずつと向ふに光つたり消えたりしてゐる燈臺がありませう、あれは大島の風早燈臺です、あれが見え出すと恰度半分の航程に來たんです、ですから茲が三浦半島の出口にあたるんです、これから相模灘、灘にかゝると船は大分揺れるかも知れせんよ、大丈夫ですか。」

大丈夫だとも！

「ホラ左に房州鋸山が見えませう、アレです」

「どれ？」

「あれ」

暗くて解らなかつたけど、折角云ふて呉れるんだから解つた振りしなくちや悪いと思ふて、

「ハ、ア」

「晝間見ると山の上が鋸の齒の様にギザ／＼に成つてゐるんですよ、折角通りながら惜しいですなア」

と、表情宜しくあるので、己れも惜しさうな顔を作つた。

兎てもチツとして居られぬ寒さだつたから「オ、寒い」を連發して、到頭又逃げ込む。今度こそは厭でも應でも眠らなくちやならな  
いと強ひて眼を閉ぶる、どうにかして夢におちるだらう。

夜半暫々眼があいた、その度毎に時計を見る幾程も経過てゐない。腹立つてムカツとするけどツイ眠むたさと静けさと傍らに心地よげに眠つてゐる有様に何時しか自分も引き入られて了つてうつと  
りした。

「西川さん、西川さん、大島へ来ましたよ」

ハツと驚いて飛上から拍子に厭と云ふ程天井で頭をゴッーン。顔を歪めて甲板に立ち出づる。

「どこですか」

「岡田です」

「ぢや私共が下りる所で無いんですね」

「えゝさうです」

それではと氣を沈着けて暢然構へる。

頭打たれた故であらうか折角の感興が皆頭の瘤に集中されて、さ  
までに好奇心を唆らない。唯青い山の下に普通の家が立ち並んでゐ  
て、舟があり、人が居る許りなんだつた、此處が詩の國大島かと一  
寸侮蔑の氣が起る。どうせ此麼凡々らしい所で下船するんぢや無い  
からと冷やかな眼で見る。その裡船は再び錨を上げた。青黄ろい山

型の島沖を通つて船は走る。

「彼處が千ヶ崎と云つて斯う云ふ歌があります、エー歌ひますよ」と、お役人さまは八字髯の下から、

「千ヶ崎沖まで見送りませうが、それから先は神のみ。どうです旨いですか」

柄にもない好い聲だつたから、も一つ何かと所望すると、「おだてゝ不了ませんよ」と云ひながら、

「會ひたい見たいが山々なれど、はなれ島故是非がない」

「面白い歌ですね」

「まだありますよ」

「國へ行くなら言傳たのむ、まめでゐるか」と云ふてくれ」

後者二ツとも大島だけに平凡の裡に無限の哀愁がしみぐくと襲ふてくる。

その裡に愈々元村が見えた、近づく毎にハッキリする。屹然として聳ゆる三原噴火山は淡く煙をなびかせて、山容いとも壮大、元村はその麓にある。どこことなく風光明媚らしい、眺望も此處ならばさぞや趣きあるだらう、もう不服面は止さう。舩舟に乗つて今し方漁つた許りの鯖のギラ／＼光つてゐるのを見てゐる裡に陸に着く。

一步！あゝ僕は到頭大島の人となつた。

「三原館へ被居るんですか」

と、尋ねられたので、「オー」と答へると、尋ねた男が傍らの女に何やら相圖した、すると「ぢや私と御一緒に」と手を出して手靴を取上げる、云はずも知れた三原館の女中である。小さい坂を登り左へと折れて行く後から黙つて随いて行く。昔し鎮西八郎爲朝が島流しにされた土地は此處であるさうな、今こそは三日に一度は汽船が立寄るので氣も強いが、昔しはさぞ淋しかつたらうと大に爲朝の爲めに同情する。あの勇氣あの膽力にはその頃の氣の荒い島人も畏伏して爲すが儘に振舞はした事であらう。

三原館に着く、此の島に此の宿あるかと屹驚する程綺麗だ。庭前の櫻がハラ／＼と音もなく散り初めてゐる。

出て來た主人ハツと平伏して、

「よくこそ」

と、いとも懇ろなり、通された室は此の旅館第一の上等室、畳青く床飾りよく先づはホツと一安心する。洋服着て髻さへあれば立派なお客になつて見えるのか知ら、それとも此の眉目秀麗が捷ち得た好結果であらうか、それなら大に奢らざるまい。

電燈が中央からブラ下がつてゐる、オヤ割合に大島も開化けてゐるぞ。女中の言葉も東京酷似だ。多くの客待遇してゐる間に何時しか覺え込んだんであらう、我等それは嬉しくない、何故大島獨特の言葉でチンプンカンプン喋つてくれないんだらうか、そこに物珍ら

しさがあり、喜ばしさが含まれてゐるんだに。もつとも此等の女中は悉く伊東から來てゐるんださうで土着の者で一人も雇ふてないんださうな。雇ふとしたつて雇はれるものがゐないとのこと。ウムそれがいゝ、其度に大島女の價値の存する所があると賞めて見たい様な氣にもなつたり、物足らぬ氣にもなつたり。

出る茶も出る菓子も異なる所がない、然かも茶器が九谷とはウンザリせざるを得ぬ、これぢや情趣如何にして湧かひやだ。

飯を食ふや先づ眠り、醒めて煙草を呑み又眠る、それが醒めてホツと一息、始めて人間らしい心持ちに返つたので縁側に出で、外を見る。

先づ眼に著くは三原山である、海からは煙が見えたが此家からは駄目、然し山の姿がなつかしい、フとお役人さまが教へて呉れた俗謡が思ひ出る。

私しや大島御神火育ち、胸に煙は絶えやせぬ。

黒潮に取り巻かれた大島の乙女等は、椿の實を拾ひ／＼その美しい聲で、遣る瀬ない胸の調べを歌ふのであらう、なんととはなくに悲しみの籠もつた淋しい情緒が溢れてゐるではないか。どこからでもいゝ、その歌を耳に傳へてくれないか知ら、純なる大島女のその聲で。遊子として什麼に其の事が翼はしいことであらうか。

波の音は手にとる如く聞ゆると、正面遙かに富士の如き山がハッ

キリ映る、恰んど富士と見紛ふ位だ、唯嶺の形が異なつてゐるの  
 で富士ではないと解つた、何山だらう、女中を呼んで訊ねると利島  
 と教へた。伊豆七島の一つださうである。

今度は右手の欄干に倚つた、伊豆半島が長蛇の如く隆起して伸び  
 てゐる、薄つすりとしてぼかした様だ。その外何等の綾なすものが  
 無い。

宿は高臺に位置をしめてゐる爲め、此の元村の一半を眼中に收め  
 ることが出来る、取り立てゝ云ふことが出来ないが濃厚の空氣が全  
 村を蓋ふてゐる様に思はれる。そして何處とはなしに雅趣がひそん  
 でゐる。純朴な氣配が動いてゐる所がある。

よじとばかり室に入つて撞つかと坐る、そして暢やかな氣持ちで  
 茶を入れ、徐ろに海上一日間の勞苦を散じた。小鳥の囀りが朗らか  
 に聽へる、目白も鶯も駒鳥もさては雀の末輩までが仲間入りし  
 て面白さうである。始めて自然と云ふ強い感じがピカツと頭に閃め  
 いた、自然だ、總てどこを見ても何を見ても自然だ、これが嬉し  
 い、自然でないのは宿の器物ばかりであらう。宿とても叮嚀で親切  
 で、先刻僕が就眠の時身分不相應の夜具を著せてくれた、その夜具  
 には椿の様があつた、一般の客には其れより下落したのを出すも  
 のと見えて先刻女中がその夜具を運んでゐる時、

「ホー今日は特別の御客があるのか、素敵なのを引張り出したね」



と、戯かつてゐたのに依つて略察せられる。

客と云へば客は殆んど十の裡九分九厘までは學生だ相で目下宿泊つてゐるのは帝大、一高、慶應の連中ださうだ、その外の仁は數へるしか年に遣つて來ないとの事、それも大低は御役人さまだ相な。風呂に行く時、頭の上へ桶を載せた純粹の大島女七八人を續けさまに見た、これと云ふ御面相は一人もゐない、大島乙女と云ふと聴がいゝが色の淺黒い體格逞ましい女だと云つたら裸足で逃げ出すだらう。

總て大島に就いて多くを期待して來ては失望する、期待が小さかつたらその中から始めて大島獨特の味を見出すことが出来るだらう。

う。宿の女中に「お前達は何が最も楽しみか」と尋ねたら「船の來るのが」と答へた、「どうして?」と更に語を重ねたら「たゞわけなく」と返事した、唯譯もなく「なんと萬感交々を包んだ言葉ではないか。己れは其の言葉を漸次と噛みしめた、涙が自然に浮んで來る様な哀愁が萌して來た。船戀しとはよくも云つた、大島を代表した言葉であらう。

原を出發の際チラと大島は牛乳が非常に安いと聞いた、如何さ文然うであらう、彼方此方に牛がウヨクしてゐた。晩になると時思ひ出した様に「もー」と遣られる。だから場所は静かだし新鮮のミルクはありだし、勉強には持つてこいの好地である、近年夏には

夥だしく學生が来る相だ、それでも室敷が澤山あるので、さまでに混雑を来たさぬとの話であつた。

夜になると、波静かなる故であらう、利島方面に點々たる漁火が海上を飾る、窓をあけて夜景と洒落れてその外なんにも見ることが出来ない。時々キラツ／＼と下田港の燈臺が明滅するばかり。村は飽く迄も暗い。試みに外へ出て見ると皆提灯で歩いてゐる。とある商店に立つて名物は何かと聞く迄もなく椿油だと答へる。椿は三原山腹へかけて夥だしく實を結ぶと云ふ、その實から油をとるは之れ又云ふ迄もない。土産にと思ふけど荷厄介である。東京にも澤山椿油が入り込んでゐるがあれは皆恰んど他の油を混じてあつて純粹の

椿油は何うしても本島でお買ひ求めになつた物でなくちやと自慢鼻うごめかされた。

一高の生徒が澤山川かけて来る爲めか宿の女中さん時々「緑も深き白楊の」を歌ふ、僕等が大島節を聴きたい如く、女中共は都の仁士の口吟びに注意するから何時しか覺えて了つたのである。

大島には傳説が色々ある、主人の口から洩れたのを一ツ二ツ書くと斯うである。

頃は徳川時代、幕府は一代官に大島出張を命じた、その代官は實に傲慢無禮、島民を畜生の様に見した、そしてあらゆる亂暴狼籍に至らざるなかつた。最初はヂツと堪えてゐたものゝ餘りの酷さに勘

忍袋を切らして「やつ付けろ」と誰れ一人思はぬは無かつた、遂に二十五人の若者團を作つて、代官輩を撲り殺して了つた。

驚いたのは島司である、此の事が若し幕府に知れた曉きには何麼お咎めを忝むるかも知れないからと、其等二十五名を丸木の舟に乗せて島から放逐して了つた。斯うすれば當然海底の藻屑となるだらうと思ふたのである、然るに天の助けか此の舟は利島に漂着した、そこで一同は有の儘述べて何卒お救ひをと願つたが利島の老人共は後難を恐れて不憫ながらも受付けなかつた。仕方がないので又も海上に漂流してゐた、所が今度は神津島に打ち上げられた其處でどうやら上陸を許されて命を全うすることが出来た。

何かと云へば神罰を恐れる島人は若しや代官の亡霊が現はれて我々を苦しめはすまいかと心配し始めた、崇りのない様にと殺した當日に毎年お祭りをして亡霊を慰める手段を講じた、その爲めか幸ひ今日まで何事も無い、祭は日忌祭と云つて毎年一月二十四日には懇ろに行はれてゐると云ふ。

此の話は僕には眞實らしく受取れる、幕府の代官の傲慢さ、官尊の絶頂時の頃であるからあつた事に違ひない、傳説とするにはチと勿體ない氣がする。世の常ならば却つて二十五名の爲めに不幸を歎くのが普通だのに村人はさはせず代官の亡霊を恐れたのに依つて察すると、代官と云ふ者の恐ろしさに胸自ら戦いたからであら

う、活きてゐてさへあれ丈けの振舞ひをする、死んだら何麼にとブルぐの結果が祭と化したのだあらう、その頃の島人の心根の優しさ、代官の人無げなる振舞ひなどまざぐ眼のあたり浮び出て来る様だ。

も一つの傳説、これも自分は信じてもいい、様な氣がする。

太閤朝鮮征伐の際、小西行長は清正と共に渡鮮して兎も角も國威の發揚に力めた、その際行長は清正の純忠なる精神と異なり、どうしたら秀吉公を喜ばすことが出来るだらうかと腐心した。素より女好きの行長、こりや一番色仕掛けで色好みの秀吉公を喜ばすに如くは無いと思ふた、其處で多くの朝鮮女を物色して「これならば太

閤も喜ばれるであらう」と楚々たる一美人を捉へ、戦ひ終つて戦利品の第一として太閤に贈つた。太閤は異國の女だけに何んだか薄氣味が悪かつた、どれ一つ家康へ進上しやうと家康へ又贈りした、家康も苦笑ひして「困つたものが來たぞ」と體よく其れを當時天主教會があつたのを幸ひ其處へ預けて「秀吉公も罪な仁ぢや哩」とホツとした。

朝鮮女は天主教を信じて暇さへあれば兩手を合はしてアーメンをやつた。さうなると家康は秀吉公に對して申譯がない、折角の頂戴物にパレン宗を授けましたとあつては飛ぶ鳥を落す公に對して強い皮肉の様に思はれたので、早速女を呼び寄せて「キリスト教を止

めろ」と命令した。雖然最早女は信仰に熱中してゐたので聽き入れなかつた。おのれ己れが斯程迄に云つてもかとおに怒つて大島へ遠島申付けた。

大島へ來ても女は相變らず「救ひ主よ」と指を組んで信仰に餘念なかつた、何時しかそれが島人に傳播した。で島人は早くより耶蘇教のことは詳しいとの話。

然う云へば三原館の下に見おろされて黒塗りの二階建の家がある、今白井市之助と云ふ人が住んでゐる、そこへ先刻東文堂御主人から紹介された某氏を訪ねて二階へ通された時、外國模様を張つた硝子戸が眼に附いたので「テ？と首を傾けると、ずつと以前此家は

教會であつた相です、教壇が此方の方にと指されたりした、獨逸人が宣教師として來てゐたんだ相な。若し此の宗教が此の獨逸人に依つて開拓されたものであつたら、仲々布教に困難もあつたらうし、教會を健てるなどと悠暢な運びに至らなかつたであらう、況んや髪の毛の異なつた外國人の宗教である、傍へも寄せつけなかつたらうが、その昔此の朝鮮女に依つて一部間に信仰心が傳はつてゐて其れが因習的に傳はつて來てゐた力が強かつたので、それ故存外早く布教も易く行はれ、さしたる邪魔もされ無かつたのではないかと窺はれる。

外に未だ傳説を聞いたが、あまり何だか「むかし」の氣がして

記憶に止める気がしなかつた。

どれ先づ一服喫まふか。

○

眼が覚める、カラリとして空は晴れた、いでや此の上天気ならば大島の生命とする三原山登りを企てなきやなるまい。

「西川さん用意が出来ましたか」

と、隣室から書家津川氏は聲をかけると一緒に立上がる。

宿を出ると直ぐ登り坂になり直ぐ椿の細道にかゝつた。椿が道の両側から互に交差してゐて道なほ暗い、所々に真白い山櫻が真赤な椿の花の間から覗いてゐる。椿には葉が少なくて花の方が多し、遠

くから見ると花で木が成立つてゐる様である。行けどもく椿は抜けられない、詩趣油然として湧いて来る、南國に來た様な気分になる、大島の命に觸れた様な感じが轟々と迫まつて來た。これだ、唯これが大島を美化するんだ、椿！風なくしてポトン／＼と落つる音にチツと耳を濟ましてゐると得も云はぬ微妙な叫び、詩の神の叫びであらう。折柄何處からとなく哀調が傳はつて來る。又もチツと耳を濟ましてゐると、大島女が薪を頭に載せて黒白の牛を牽ひて大島節を口吟びながら遣つて來るのであつた、その背景のよさ、配合の面白さ。これさへ見れば大島へ來て何んの失望があらう、何んの不服があらう、自分は之れさへ掴めばそれで宜かつたのだ、之れを

掴みたい許りに逢か海路を越えてやつて来たのだ。

椿よ、山櫻よ、大島女よ、歌よ。鳥の朗らかな囀りさへ時に交つて。椿の國、詩の國、それは此處ではないか、今自分が歩いてゐる此處がそれではないか。瞑想せよ、而して歌へ、心のまゝに、自由のまゝに。二人は暫し座はつたのみで黙つて身も心も投げ出した、そして詩の實現に自分を結び付けた。

「行きませう、遅れますよ」

と、半ば夢心地をハタと起されて、急いで立上がる。

椿の中に浸ること十數町、漸つと抜け出ると今度は俗に炭の木の間へ入つた、赤ん坊の腕程の太さで高さ一間ばかり。津川君の話に

依ると村人は此の炭の木はドシ／＼切つて倒すが、決して斧は椿に觸れないさうな。椿はちのれ達のパンであり命であると思ふてゐるからであらう。

炭の木の間にも時々椿が笑つてゐる、そのしほらしいさ又捨て難い。炭の木は毎年次第に減るが椿は年々多くなるとのことだ。さう聴くと何故だか己れはニツと微笑んだ、そして落ちた許りの椿で頬をスツと撫でた。

試みに眺望如何にと立止まつた。

富士がヌツと顔を出してゐる、突然だつたので屹驚して了つて、「オヤ、オヤ、オヤ。元村も見えるし、渚も見えるし、伊豆の諸山

は勿論のこと、爽快な眺めである。例に依つて感歎詞を亂發して又登る。それから砂漠である、十町許り。それを過ぎるとグツと急な下坂、足をビク／＼させて下る。ホツと一息して又登り坂、今度は熔岩の間を足を縮込めながら抜け出て一氣にてつべんに喘ぎ着き、又下る。茲で始めて噴煙至る所から見ると、煙は黄青い。

とう／＼来た哩と重荷を下ろした様な氣になつて煙を目がけて一目散。煙は熔岩と熔岩の間から噴き出てゐるのだ、その柔かい所をステツキでギウと突いてやると、待つてましたと許り其處から噴き出る、こりや面白いそれぢやと試みに石をめぐつて見ると、有難うとばかり噴き出て来る。斯う云つて了へばよくも其處危険な所へ近

寄れたものだと驚くかも知れないが、なアに平氣だ、熔岩だから堅いので足場は丈夫だ。

大きな噴火口は二ツある、ゴーツと物凄いな唸りを立て、煙を吐き出してゐる、何處か知らと覗き込んで見たが、煙に妨げられて意のままに成らぬ。癩に障つて石を投げつけて見たが知らぬ顔の半兵衛さんを濟ましてゐる。此處ン所を村人が見たら火の出る様に叱るかも知れない、神火と崇めてゐるんだもの。なアにと鼻で扱つてはならぬ現に一昨日の如きは一高の生徒が面白半分此の口めがけてジャアと立小便をした、所が歸途盛んに轉んだり躓づいたので、急に御幣の馬鹿にならぬのを悟り、俄かに噴火口まで立戻つて「許



してたべ」と勘辨かんべんつたお蔭かげでそれから何等なんらのことが無なかつたと津川つがは君くんは物語ものがたつた。僕ぼくも豈まさか夫かと思おもひながらも若もしやの事ことがあつてはと、  
「今石いまいし抛なつて濟すまなかつた、失敬しつげい」と一寸頭ちよつとあたまを垂たれた、詰つまらぬ馬鹿ばかして詰つまらぬ御辭儀おじぎをしたものだ。

歸かへりみち又また富士ふじを眺ながめた所で立止たちどまる、成程なるほど之これが濶大くわつだいなる展望てんぼうと云いふのだらう、先刻せんこくは氣きが附つかなかつたが、イヤ或あるひは霧きりの爲ために邪魔じまされてゐたのかも知しれないが、今度こんどは千ヶ崎ちよさきや大島おほしまの大半たはんが快たよく眼めの中なかに收ままつてくれた。

「貴方あなたは大島おほしまの女むすめを何なにう御觀察ごくわんさつなさいましたか」と、椿つばきの細道ほそみちへかゝる途端とたんから津川つがは君くんは訊たづねた。

「存外ぞんぐわい淺黒あさぐろいぢやありませんか」

と、僕ぼくは眞赤まつかな椿つばきを踏ふみ蹂にぢつた時答ときたへた。

「そりや可哀想かあひさうですよ、私わたしは白しろいと見みましたが」  
ほたりと椿つばきが落おちた。

「さうでせうか、私わたしの見みた何なにの女むすめも確たしかに淺黒あさぐろかつたですが」

山櫻やまざくらがバラ／＼と二人ふたりに吹雪ふぶいた。

「ぢや貴方あなたは運うんが悪わるいんですよ、淺黒あさぐろいなどゝ仰おつしやると乙女共おとめどもが泣なきますよ。白しろいです、白しろいぢやありませんか」

「アア」

と、僕ぼくは考かんへた、確たしかに淺黒あさぐろかつたと思おもふけど、己おのれの眼まなこがそれぢ

や東京みやこの白粉おしろいを着つけた女をんなと比較ひかくしたんだらうか、それで大島女おほしまをんなの地色いろが氣きを惹ひく程ほどで無なかつたんだらうか。いや、いや、さうぢや無ない。

「君きみは比較ひかく的てき白しろいのを見みたし、僕ぼくは黒くろい方ほうを見みたんでせう。だから白しろとも斷定だんていも出來できず、黒くろとも斷定だんていする事ことが出來できない譯わけですわね」と、僕ぼくは折衷せつちゆう説せつを持ちもち出だした。自分じぶんは假令たとひ如何いかに云いはれ様やうが他人ひとの口車くちぐるまに乗まつて僕ぼくの得たた尊たつとくき觀察くわんさつを曲まげるに忍しのびなかつた。

「如何いかにも仰おんしやる通とりです、淺黒あやぐろいのも隨分ずいぶん居ゐるますが」

「それ見みたまへ」

「妙めづですわね、娘むすめざかりの女をんなでも赤あかいものを殆ほとんど身體からだに附つけてゐな

「ですわね」

「何故なぜだらう？」

「土地とちの風習ふうしゆでせう」

と、津川君つがはくんは答こたへた。途端とたんに又またどこかではとんと云いふ音ねがきこえた。椿つばきだ。

「わかつた、椿つばきの花はなの赤あかさが目立めだつから引立ひきたたないからでせう」

二人ふたりは期きせずして四邊あたりを見廻みまはした。

「さうでせう、さうでせうね」

と、津川君つがはくんは幾度いくたびも繰かり返かしながら、その返事へんじが如何いかにも自分じぶんの氣きに入いつた様やうだつた。其麼そんなに此この言葉ことばが強つよく響ひびいたのか知しらと自分じぶんも

頭の中へ今云つた言葉を再度呼び起してみた。

大島の女は皆麼黒色で着物の色彩を整へてゐる。若きも老ひたるも然うだ。そして眼が非常に強い印象を與へる、眼の働きが非常に鋭敏である、何故かならば女は總て持つ可き物のなんでもを頭に載せる習慣がある、「えゝッ小邪魔な」と云つては頭へ軽くのせる、だから頭の便利なことは非常なもので袖にもなれば手下げにもなる、饅頭の喰べさしでも「オツと他人が來たぞ」と頭へスツと隠す位だ、これは戯談だが、兎に角一二もなく頭へ載せることは確かだ。で随分重さうな物でも平氣に載せてゐる、その故で何を見るにも首を曲げないで眞直にしてゐて見ると云ふ風になるから眼が鋭く働

く、よくピスマーク式の眼玉に出喰しますよと津川君が云つたが、面白い批評だと思ふた。一般に眼が大きい、大きくなる筈である。夕方、濱邊へ出る。

大島の妙齡さんを見むと欲すれば朝夕濱邊へ行つたら一番いゝんださうな。

ゐる、ゐる、澤山ゐる、皆麼は例の如く頭へ薪を載せて、急造の棧橋を渡つて船の中へ其の薪をひつくりかへして又戻つてくる、所謂大島女のお仕事振りである。二三十人一行を作つて棧橋を渡る所なんか大島ならではと思ふ、天下の奇觀だ。

年寄りの女もゐる、年齢は七十八十のシワクチャ顔だが、その元

氣のよさで無い、ハッキリした肉聲で怒鳴つてゐる、聲と云へば言葉が聴いてゐても何んとはなしになだらかである、「なアー」と長く語尾を引張る所に悠暢な島の生活が密んでゐる。そして盛んにアンコが出る、「ねえさん」と云ふことだ。

大島の老人は決して腰が弓なりにならない相である、それは小さい時から頭に物を載せるから自然に體格が凜とする故である相な。見てゐると七八歳の子供までが盛んに親を見做つて頭へ物を載せてゐる、賞めていゝやら悪いやら。

だから頭は彼等の唯一のパンを得る財産である。

彼等は帯を絞めない、前掛けでくるりツと胴を巻いてゐる。袖の

ある着物も誰れ一人著てゐない筒袖みだ。男に代はつて働くからであらう總ての働作が男性的である、乙女と云ひたいが、乙女と云ふ字が可哀想だ。

髪は黒くて長いと云ふ事は事實である、丈なす黒髪とは大島の女の髪に形容する言葉であらう、色飽く迄も黒く而かも光りがある、椿油がお手の物だもの。

頭には紺或は白の手拭をくるく／＼巻きにしてゐる、それは寝る時で無くちや外さない相だ、鬢なんかを出してゐる女は一人もありやしない、若し其塵事をしたら仲間から一遍で「彼奴ハイカラになつたなアー」と許り、立所に排斥される憂があるんだ。

矢鱈に女のことを書いて濟まないが、大島を知らむと欲すれば先づ大島女と椿が何よりの名物だ、女が名物とはチと云ひ過ぎたかも知れないが勘辨して呉れる。

津川君は結婚式を見たと言ふ、なんでもお重を風呂敷に包んで知合のものが花嫁の家へ持参した相な、そしてお重の中には金を入れてあるとのことだ。定刻に至るや同じく知合から贈られたうづ高い米穀を外に積んでおいて中では盛んにドンチャン〜大騒ぎし、お萩を作るものも居れば一杯ひつかけるのもあつた相だ。花嫁は別室で金の入つたお重の積まれた中から此の様子をヂツと見てゐるんだとさ。愈々時が来ると花婿の家へと乗り込む、その時村の姉さん達か

擧つて米穀を頭に乗せて行く其の中頃に位置を占めて花嫁が歩いてゐる所まで見て歸つたと云ふ、あとは知らないと言ふ。

葬式も見た相だ、葬式は棺を醒け出して其の上へ死人の一張羅をオツ被せてある相で、その時始めて大島女の盛装を見たが、袖の着物を着てゐて、帯の結び目は前の方へ廻はし、その中へ手を入れて歩いてゐたのが奇妙だつたと。

夜になる。

遣る瀬ない旅愁を紛らすが爲めだらう、彼方からも隣室からもろ覚えの大島節が洩れて来る。拙手ではあるが中には咽喉のいゝのがゐる。それでも満足出来ないと思つて「オーイ」と下の女中を釣り

上げて「又ですか」と云ふのを無理に壓へて歌はせてゐる。そして其の後からゾロ／＼と親不孝聲を絞つてゐる。

僕は黙つて其等の聲に耳を敬立てた。ドツと笑ひ崩れては、「わたしや大島御神火そだち」と怒鳴つてゐる。むくつけき毛脛共に御神火そだちは噴き出させる。

明日は立つことにしやう、一人旅は何んと云ふ淋しい悲しい厭なものだらう。氣が暗へ引きずられる様になつてくる。

離れ島、孤島。

淋しい！あゝ淋しい。

○

牛乳一杯貳錢五厘と聞いて呑むわ、呑むわ、因果は忽ち廻りて腹の中が音聲唯ならぬ、幾度か便所へお百度を踏む。昨夜津川君と約束してあつた大島婆さんの家へ出かける。どうして此婆さんと知合ひになつたのかと聴くと友人の上田君が其の家に間借りしてゐる關係から物を云ふことに成つたとの事だ。何故又僕にそのお婆さんを訪ねる氣が出たかと云ふと、津川君が昨夜同君を訪問した時、婆さんがのさばり出て来て、乞ひに任せて大島節を盛んに歌はせて聞かせたさうだ、馬鹿に聲がよかつたから明朝僕と一緒に被居いませんかとの事であつたからだ。

宿から直ぐであつた、お婆さんは圍爐裡の側に座つて番茶を呑ん

でゐた。僕等が入ると愛嬌のいゝ笑ひを見せて應對する、僕を新客と思ふてか其の傍らに座を占めようとするやと強く遮さつて坐敷の方へと導く。

「婆さん又歌さかせておくれ」

と、津川君が云ふと、婆さんは何だか返事した、その答への意味が己れには何うしても解らなかつた。

「承知したのか」

と、津川君を振向くと、

「おん」

と、津川君も解らなかつたらしい。なアに手さへ隙けば喜んで歌ふ

て呉れるよと上田君の勵ます言葉につれて元氣よく座る。一ツ二ツ話をしてゐる所へ、「やア上田君ゐるか」と二人の商船校の連中が遣つて來た。

「何しに來た？」

「歌を聴きに」

と、淡泊したものの、ドカノノと入り込んだ。人數は總勢五人だ。津川君は催促にゆく、婆さん大勢になつたので怖氣が附いたのか、それとも氣恥かしくなつたのか、「今忙しいから」と云ふ名目に獅嚙み附いて出て來ない。ねえ歌つておくれよと頼んでもモジ／＼する

「ぢや歸るよ」と云ひ出すと、遊んで行けと止めてやまない。では

歌ふかと強請むと、「イヒ、遊んで被居いよ」と出る。兎角の押問答の末一同は到頭互々に歸宿する事になつた。

二階から見下すと今朝早く着いた高砂丸が見える、津川君は其の船で今日は歸るんだと云つて準備に急がしい。僕も伊東へ行くんだからと細いものを片付けてゐると女中がアタフタやつて来て「今日は伊東行きの汽船は出ないらしいですよ」と告げに来る。「え？」とがツかりしちやつた。昨夕から樂しみにして今日の日を待ち疲れてゐたのに。然しらしいでは一道の光明があるかも知れないと、自身で汽船會社へ出張して「斯々だが眞實か」と念を押すと、「多分出ないでせう」と同じく斷定的でない。出ないのなら出ないと明白云つ

てくれ、ばいゝのに。アヤフヤな返事するので心宙に迷ふて了ふ、

「どうしても駄目ですか」と稍怒氣を含むで訊ねると、

「北風が強いですからねえ」

と、取合つてくれない。それに我を折つて出ないでせうを勝手に出ない〇〇と定め込んで了つて悄悄歸る。

宿では今日伊東行きの連中が大分あつた、それが斯様に模様が変わつたので皆麼東京へ戻ることになさいましたと女中は氣の毒相に僕に云ふ、僕一人が俊寛みたいに取残されることに成つたのだ。唯でさへ淋しさに堪えられぬのに宿泊の連中が皆麼あさらばを定めこまれちや極度の神經衰弱で倒れて了ふかも知れぬ。口こそ交はさね互



は旅の者同士としてたのみ合つてゐたのである。

僕は悲觀の餘りグナリと仰向きになつて拱いた。もう出發の時間だと云ふので各室が元氣のいゝ高らかなさゞめきに動搖いてゐる、都へ歸ると云ふ力強い吸引力が氣も心も爽かにするんであらう、なんと嬉しさに聽ゆるであらう。あゝ胸が張り裂けさうだ、自分一人がぼかんと取残されるのだ。これを眞實の鳥流しである。宿の主人の明日若し又風が此の通りであつたら又延びるとの言葉が電光の如く頭に閃めいて來た。あゝ自分は我慢に我慢をし、堪忍に堪忍をして今日一日を踏みこたへるとして、明日又船が出なかつたら何うなるだらう、氣が狂ふかも知れない、息が止まるかも知れない。あ

の張り切れた様な喜びの聲、もう宿を出て行くんであらう。

「皆さん早く用意なさいよ、船は應て出ますよ」

急にせわしさが烈しくなる。都へ歸る人々は歌ふ、勿ねる。

ガバツと己れは夢我に立上がつて、續けさまに呼鈴を鳴らした。女中は何事の起つたと走つて來る。

「勘定、大急ぎで勘定、僕も東京へ歸る」

「え？」

「早く、早く」

吃驚して女中は飛んで行く。

己れは急に今までの陰鬱の境からカラリツと脱した。到頭自分も

其の樂しかる仲間の一員と成ることが出来た。不思議や何等の未練も執着の念もない。それ丈の餘裕がなかつた。皆歴はもう外に出る行く、遅れては取返へしが附かぬと許り、帳場で地團駄踏んで、

「勘定はまだか、勘定はまだか。」

主人は細かに一ツ何々と書いてゐた首を擡げて、

「只今直ぐ」

僕はもう一同の姿が見えなくなつたので、今一秒で置去りにされる位に急ぎ込んだ、

「其廢物ど、どうでも宜しい、い、幾程だッ」

と、云ふが早いか財布をパチリと披いて返事を待つと云ふ慌てさ加

減、天晴れ好紳士も斯うなるとヤンチャつ子と何等選ぶ所がない。

「早くつてたらッ」

と、遂には嘴尖がらしてブツリとした頬べたを形成した。大事のお客さんを怒らしてはと主人漸つと書き終り總計をと算盤を掴むでパチとくくく遣つたが、これも氣がわやくくになつたものと見えて違へてばつかし。

「え、自裂體ッ」

と、僕が悶ゆれば悶ゆる程一を入れる可き手先きが五に觸れ、丸を算上するを七にしたり慌てる、慌てる。傍に先刻からむづ／＼兩方へ氣を配つてゐたおかみさん、

「貴方、どうしたんです」

と、主人を叱り飛ばしながら、自分が書附けを取上げて、

「ようござんすか、讀みますよ、エー」

今度は主人も一寸落着いてパチ／＼、足踏み鳴らしてゐる僕の眼先さへ突き付け、

「どうもお待遠うさま」

「そら釣銭は不用ぬ」

と、靴紐碌々括りもせず、二町競争の様に帽子を掴んで一行に遅れまじと息セキ駆け出す後から女中が濱まで見送りにトツ／＼。

呼吸をはづませて濱へ来て、血眼になつて津川君の姿を物色する

と、なーんのこつたい暢氣さうに煙草を燻らして此方見て笑つてゐる、さては未だ時間があつたのかと近寄つて尋ねると、

「まだ小一時間も出ないさうです」

「ヒエーン」

と、狐にばかされた様な顔付してゐる所へ、女中が汗みどろ駆け付け「オ、苦しかつた」と胸を壓へてスウ／＼云つて、僕と同じく四邊の様子を見て「此麼事だつたら急ぐんぢや無かつた」顔で、事の張本人なる僕を憾めし相に見詰める、大に氣極りが悪かつたので空ばかり眺めてた。

その裡宿の男衆が呑氣さうに己れが忘れた手靴を下げて遣つて來

る、益々氣恥かしい。茶代も女中へも遣らぬ積りだつたのが、何やら斯やら濟まぬ事ばかり仕出かして來たので、後向きになつて手早く二封に別ち、萬年筆で「お茶代」「女中へ」と認めて渡す。男衆九拜して頑丈な手を差伸べた。

茶代は絶對的遣らぬ主義を一寸破ること然り。

濱には大島女が澤山蹲んでゐた、仕事の休みであらう、彼女等は多數を恃んでか小言で歌をうたうてゐる。どうしてもハッキリ聽へて來ない、斷續的に耳を掠める。津川君ヂツと彼等の様子を見てゐたが、その裡旨く身體を忍ばせて近づき恰度彼女等の後の材木にスツと蔭をひそませ、稍經てから、にこ／＼遣つて來ながら、

「解りましたよ」

と、誇り顔に云ふ。

「歌ですか」

「え、千ヶ崎沖まぢや見送りませうがあの歌を」

「ホー」

と、一同の眼は津川君の身邊に集まつた。

津川君は長く大島に滞在してゐた丈けあつて大に通振つて、抑々此の歌は以前ある島の女が内地人と深い戀に墜つてお互が離れ島であらうが二人の仲は離れまいぞと堅い約束を取交はしたのであつたが、素より玩弄半分に戯らかつた内地の男、もういゝ時分と旨く云

ひ説いて内地へ逃げ戻らうとした、その時女は切々なる濃情やる瀨なく、失神せる如く離別の惱みに疲れて、戀ひし男を見送つた時、自然に口から思はず發したのが此の歌であると説明する。

一同はぐるりツと女の方を振り向いた、彼女等は矢張り吟んでゐる、すると菅野君が大きな聲で「歌丈けぢや駄目だーい」

ぢや眞實に惚れて欲しいのか宜しい惚れさして遣らうと云ふが早いかワツシヨイ〜と無理に菅野君の手持ち足持ちして、女連の方へポイント押しやりながら「イヨイ色男」

菅野君頭を抱へて逃げ込み「オイ參つたてたらー」  
稍して上田君が皆慶の方を向いて、

「今朝ね、静かにッ。」

わたしや大島一枚の櫻

八重に咲く氣はさらに無い

へんお花が僕の送別に故意々々歌つてくれたんだよ、氣に入つたねー」

後の文句が宜かつたねー。

聽てその裡に艇舟が来る、どや〜と一同は先きを急んだ、今度は慌てまいと悠つくり最後から隨いて行かうとすると、突然側から一人の男が飛び出して、

「先生、お大事に、いづれ又」

と、叮嚀に挨拶される。よく見ると今朝上田君の家で顔を合はしたばかりの商船校の生徒だ、ぎゅッと握手して別れる。

解舟から本船に乗るが早い。甲板からスーッと首を出すと、陸では商船の二人が盛んにハンケチを振つてくれる。僕も同じく帽子で應へる、送る人の胸の中には此の船が都へ今日着くのだと思ふ心と自分等が取残された様な淡い哀愁があるであらう。

わが乗る船は都へと思ふ感じに帽子振る力も強い。

動き出した、すると今まで蹲んでゐた大島女等は一切に立つて頭の手拭をはづして強く振つた、僕はその時始めて譯知らぬ感激が湧いた。



振つてくれ、振つてくれ、いつ迄も振つてくれ。

いざさらば大島乙女よ、椿の國よ。

◎詩の伊香保

大島から久々で家へ歸ると——僅か三日の大島滞在に過ぎなかつたけど、僕には一ヶ月もおさらばしたの感がある、汽車のない所へ行つてゐると、其麼感じには誰れしも打たれるのである。——故郷から妹が上京してゐて僕を待つてゐた。今度こそは獨り旅はすまい、いゝお供が出来た哩と許り、御機嫌斜めならず、猶この上の同勢あらばと思ふてゐる矢先、細田夫婦も何處か新婚旅行をしたいとの宿望を仄めかしたので、散々四ツの首を集めて考へた末

が到頭伊香保行きと定まつた。

己れは一體伊香保は内心嫌ひなのだ、なんだか弱々しい女性的の香ひがひそむでゐるからた。「不如婦」の浪子と云ふものが禍をなした故かも知れぬ。眼を閉ぶつて見ると、あの浪子の突けば倒れさうな身體や、一ツ云へば二ツ目に血を吐くひよろ／＼とした様子がまさ／＼浮び出て来る。その血、その涙がこつてり伊香保に浸み込んでゐる様に思はれる。伊香保と聴くと纖弱ななめらかな詩的な優しい名であつて、不如婦の浪子と云ふ主題がなかつたら遊子の心情轉た切なるものがあるんだが憾らくは彼奴伊香保を殺してくれな哩。それぢや其の伊香保に何故己れは賛成を表したか？。

それには二つの理由がある、一ツは嘗て僕の友人犬丸君が伊香保に遊んだ述懐談を彼が今の妻君と見合の席上で洩らした。「見合の場で此廢事を云ふもテ恥かしい次第だが、私は伊香保こそ新婚旅行をするに最もいゝ所だと思ふ」と云つた言葉が自分の頭のどこかにはコピー附いてゐたのと、も一つは我が妹や細田君の新妻があの肺病野郎の浪子に悉皆萬斛の同情を表して了つて、是非あの遊んだ地だからと泣きつく様に悶へたからである。更に恐れながら最後にモ一つは己れが大島の堪え難い旅愁につく／＼凝りて了つたので、今度はそれと反對に晴々しい華かな思ひ出を作らうと思ふたが爲めである。最初伊香保と聴くと烈しく首を振つた僕が次第にその光芒



を失せて、遂にむやくの裡に賛意を表したので女軍の喜ぶこと一方ならず、握手しませう握手しませうが雨の如く霧の如く。

「明日は雨ぢやないか」

と、心配相に氣勢を殺る様に云ふと、

「さ、え御覽なさい、星が降つてゐますよ」

と、テンから相手になつてくれない、もうケチは附けまい、さらば行かう。

翌朝は果して朝ツから一年中に此麼いゝ天氣があるかとばかりの上々の空。有難や嬉や女房——どつこい妹喜べと、勇んで身を堅める。妹の姫君誰れに見せよか此の標緻と塗るわ、擦るわ、鏡の前

に釋宗演さん見たいに三味の有様、

「これ遅くなつたら何うする？」

と、兄貴顔して一言呈すると、

「アラ、も一寸だからこれこの通り」

と、手を合はさむ許りを殊勝な態度が悉皆氣に入つちまつて、

「ウムよいともく」

然し何時までの猶豫も與へられぬ、二度目の兄貴顔が再び口から出ようとした途端妹がヌツクと立上がり、

「さア行きませう」

上野ステーションは近いので先はそろり／＼參らうと一歩度に、

「兄さん」「君ちゃん」と立止まり、さて漸くにして停車場に着くと、細田君血眼になつて飛んで來、

「な、な、なにをしてゐるんだ、も三分しか無いぢやないか、は、早く」

と、尻に火を點ける様な追ひ立てまくり、失敬したどうもと帽子を脱ぐと、「お辭儀なんかどうでもいゝ」と脊中をグイと押されて、あつたふたセカンドで高崎行（一圓六十錢）を二枚買ひ、それ遅れて子孫々まで恥を残すな、君子續けと夢中に汽車を目かけて駆け走ッオイツ、恰んど乗ると一緒にゴドンを搖れた、オ、すんでのことだつた。

車内で細田若夫婦怒るまいことか額に筋を出して「どんなに心配をしたかも知れない」と關羽もどきの凄顔して立腹するので兄妹小さくなつて縮こまり「許してたべ、許してたべ」。たべが氣に入つたからと一同茲に始めて四海波穩かなり。

坐ると同時にフと自分の眼の前に一人のカーキ色の軍人が見附かる。

「オヤ！」

「オヤ！」

「これは飛んだ所で」

「イヤ全く意外で」

「Scene」

「一週間程前に」

「さうですか」

と、ツイその側へ坐り直した、第〇師團の某大尉であつて僕と一時は非常に仲がよかつたのが、それぐの趣味に走つた爲めついでお互は疎遠勝ちであつたのである。だから話はげに泉の如く滾々として盡さない。又出る又出る、更に又出ると云ふ程で、我れ我れを忘れて話に夢中になつて了つた。

不服なのは細田夫婦に、妹の君子だ、僕と云ふ一座の座頭が分捕られたので消げること一方ならず、憾めし相にカーキ色を睨む。素

よりカーキさん何んの悟る所あるものか、「それから」とそれから詰くめで征め寄せる。此方も時々「それから」を受賣りする。

「一緒に来たのは誰れ？」

擔いでやらうと、

「あれ？ 僕の妻です」

「ホー、美人だねえ、何日貰つたー」

「三日前に」

「これはく……………して何處へ」

「伊香保へ新婚旅行よ」

「あのモ一組の連中もー」

「さうよ」

「さうよも無いもんだ、君等は呑氣でいゝねーえ、かるが故に軍人は詰らない」

と、映々として楽しまない聲を出して美ましがる。

三時間で高崎に着く、軍人と別れる。直ちに伊香保行きの電車に乗換へる。座頭を奪ひ得たので一同愁眉を悉くひらき、

「あの軍人大分感興を瀧いでよ」

と、君ちやんは好きな兄さんを拜借されたのが餘ッ程癢に障つたらしい、細田若夫婦はその割でもない、時々水も洩らさぬひそく話がかすめて来る。甘い叫び！ 妹邪魔しちやならぬ、も一寸此方

へ来いつたら。

汽車の中からは明瞭してゐた妙義山は電車に變はつてからも見え隠れつ、その代はり赤城が次第に鮮かになつて来た。澁川で止つた時、ドヤ／＼と烏合の衆一時に乘込んで来た、中學生もあれば女學生もある、商人もあれば百姓もある。ワツシヨ／＼と押して入つて来るので、皆廢はスツと伸ばしたゐた足を折つて了ふ。

「これからの景色がいゝよ」

と、細田君自分が此の前一度来た経験があるもんだから解つた口を利く、一同大に緊張して窓に注意する。

成程それからの赤城の雄姿は書き出した様に壯麗であつた。

生憎その四面には之と雄を争ふの山がない、全で天下の大將己れひとり面である。山の頂には雪が少し見えな。

山地にかゝつた故であらう、電車はおそかつた、這ふてゐる様だ、此麼美しい眺めを遁しちやならぬと故意と後らかしてくれるかの様だ。まことに迎へては又おくる景色のよさ、悉く詩である、歌である。杉の木立の間から赤城が覗いたり、桃の花の間から覗いたり、赤褐のその山の色はたぐひなく美しい。

美しいと云へば春の旅の心よさ、櫻、桃、その他黄色い菜の花などがポツリ／＼と咲いてゐた。全で瑞西の山地へ入つて行く様に遠く越後信州の境の雪を被つた山々が次第に大きく見え出した。

高崎から二時間で伊香保驛に下りた、上野から約五時間、ホツと疲れた身體を又も車にゆられて温泉に向ふ。

直ぐ坂にかゝつた、歩けばいゝのだけど足の弱い妹や細田新夫人の爲めこの運びを取つたのである。なんの男同士なら坂と云へば坂と云ふものゝホンの一息である。夢俣とは罰が當たる。

俣は伊香保第一の木ぐれ旅館の前で止まつた、見上ぐるばかりの大廈高樓である。車から下りて始めて二人びきであつたのが知れた。我輩近頃の傑作を仕出かしたものだ、今更取返しも附かぬから其麼お育ち面を作つて玄關に立つと、出るわ／＼男衆も女衆も主人もおかみさんもドツと出て来て、「よくこそ、お疲れでせう」と下

にもおかず、乃公慌て、眼を擦つた。

入つた時は四人一緒であつたが、通された室は細田夫婦と別々であつた、新婚と見込んで甘く捌けた哩。

欄干から見た景趣、歌右衛門の五右衛門ぢやないが「絶景かな、絶景かな」である。小野子山、子持山の二大山の背景には白幕を張つた様に越後諸山が連なつてゐる、眺望洵に雄大、雲の色、空の色、山の姿、何事もなく悦に入ること夥だしい。

寝る時だけは列外として其の外總ての起居は共同動作であつた。湯も一緒なら散歩も食事も一緒である。湯と云へば湯は濁つてゐる、新らしい手拭も薄黄ろい色がつく。「木ぐれ」旅館内ばかりで此

の内湯が幾つあるかも知れない、それ程湯には豊富な天地である。食事は總て此方の注文に依つて拵へると云ふ風、なんだか厄介だ。

晩の賑かさて無い。その内の細田君の話を一つ紹介する。

伊香保に程近い所に浪子澤と云ふ澤がある、そこに石がある、浪子はそれに腰を下ろすが早いか放屁した。何分肺病で身體が弱り切つてゐるので、屁にも元氣がなく音がしなかつた。傍に勿論武雄がゐた。で浪さん武雄の方へ臭みが發散したのが氣になつて、

「アラ濟まないわ、臭かない？」

武雄さんは何分好きなく浪さんの屁だから鼻をクンクンさせながら「クン臭かねえ、クン、臭かねえ」

所が又出た、今度は浪さん一番思ひ切つて音させてやらうと思ひ、ウンと總身に力を入れた爲め猛烈な音がした、その代はり勢あまつて血を吐いた。

その音が殊更に大きかつたので、蔵を探してゐた千々岩が飛んでやつて来た、彼は恚意の炎を燃やして、

「己れにも其の音を聽かせてくれ」

と浪子に迫り寄つた。生憎その時浪さん屁が出なかつた、だから斷はつた、千々岩怒るまいことか、

「武雄にさかせて己れにさかせぬ事があるもんか、依估最肩があるぞ、僕を蔑しろにするぞ」

と、詰め寄つた。

「これッばかしは」

と、浪子は千々岩に拒んだ。すると千々岩はあゝと天を仰いで、

「浪さんと武雄は臭い、我が想思遂に止みんぬる哉」  
だとき。

勿論作り話に過ぎぬけど、所は伊香保丈けにおへその宙返りつたらない。

夜は一同散歩に出かける、流石に旅は暇だと見えて宿屋姿のどてら共がうよくと蠢動してゐる。

繪葉書店の前でまだ委つくり見物もしてゐない癖に此の寫真はい

い、酷似だ、違つてゐるわと勝手な熱を散々吹きかけた擧句の果が漸つと二枚買ひ求めて出たので、おかみさん澁面作つて「チエツくイヤどうも有難う御座いました」

通り過ぎる人、擧つて振返り、振覗き、

「きれいな嫁御だなア——」

に妹真赤になり、

「兄さん早く歸りませうよ、ねえ兄さん」

驚いたことがある、それは僕等に見えつ隠れつ宿の男衆の一人が隨いて來たことだ、何故隨いて來たのかと云ふと、若しや此の貴き旅客人に對して無禮の微塵でも仕出かす者があつたら、やをれと躍

り出て守護に任じよう云ふ影武者であつた、斯うなつたら憚りながら護衛附きの大臣待遇だ、指あらば觸つて見よ。喧嘩をふツかけられたら尻を捲くつて啖呵を切らうと思ふてゐたけど、止めた、止めた、護衛附きの貴賓が其麼無様を心得へてゐるものか。

明日は女共丈けを籠に載せ、我等男二人は歩行で榛名登りと定め、願くば在天の神よ明日は空を晴らしたまへ淨めたまへと一同眞目面に東に向つて八ツの手を合掌して、絹蒲團の中に身を埋める。絹に御注意あれヘン。

○

「起きなさいつてば、寢坊だねえ」



と、妹の奴兄の睡眠を邪魔すること切りなり。

「眠いつたらー兄だよ」

と、一寸虚勢を張つて見せると、

「兄でも何んでもいゝ、起きなさいつてたら」

と、蒲團を刎ねまじき氣配、親にも見られぬものを見られてはと後向きにツと立つ。細田夫婦は？と問へば同じく今起きあがつた許りだと云ふ。妹に幾時に起きたんだと訊くと烏のカア／＼と孰方が先きたつたか知らと小首を傾ける仕末、全でお話になつたものぢやない、いつ迄此處可愛いゝのが續くか知ら。

朝飯が銀座の真中で喰てゐる様な賑かさで終ると林檎が出る、年

順からと云ふので妹は一番大きいのを、反對に僕が一番小さいのを取残こされ「年寄りを虐待するもんぢやないよ」

十一時頃になつたら出發しやうと暢んびり構へて其の旨女中に通知すると、

「もう、今朝早くから籠が待つてますよ」

と、意外な知らせに鼎の湧くが如き大騒動、オイ寫眞機は何處だツ、財布は、靴下はツと上へ下への混雜宜しくあつた後、型の如く家の子郎黨共に「御機嫌よく行つてゐらつしやいまし」と送り出される。就中おかみさんの如きは坂下まで見送つてくる。茶代をウンとせしめる手合だナ。

榛名湖は伊香保より二里の山中にあつて、湖そのものよりも其の途中の風致の壯大幽艶畫よりも美しとは豫ねてよも聞き及んだ所、これを遁しては伊香保に來た甲斐があるか。

道はズツとW式に曲がりうねつてゐる。山の中腹を縫ふてゐるのである。涳々の川の音もない、潺々たる泉の湧き出でもない。けれども山の姿、趣さ、それが次第に變つてくる、捉へ所のない風雅な眺めもあれば、雄大にして氣心自らわななく宏壯な氣宇に溢つて來る様な所もある。早い話が唯それ詩である、悉く詩である。歌はしめねば止まない。伊香保は浪子に依つて兎や角批評されても澁川から伊香保まで、伊香保かい榛名までの此の詩は讚美しなげねばな

るまい、この無韻の響き、静座して歌へよ、地に俯してその音に耳を觸れよ、何物か襲はむ、襲ひ來たるの時汝自ら汝より離れ油然として汝、汝たらざる可し。

「籠で行くなら」と大變な元氣でゐた妹や細田君の妻君はどうも籠が小さいので其の首が邪魔になつて沈着かぬと見えて、切りに氣にしてゐたが遂に我慢仕されなくなつたと見えて、「誰れか此の首切つて頂戴よー」

「あれが夫婦山です」

と、籠擔ぎさんに教へられて細田君ハタと眼を据えて、

「さうか」と、返事しながら、

「彼山（きやま）まだ我等（われら）と同じくまだ新婚（しんこん）早々（ささ）と見えて赤（あか）ン坊山（ぼやま）を拵（しら）へてゐない哩（わい）」

猶（なほ）ほ少し進（すす）んで行くと、遙（はる）かの山（やま）の中腹（ちゆうぶ）に雪（ゆき）が所々（しよしよ）に白（しろ）くポツリポツリとある。今頃（いまごろ）まだ雪（ゆき）がと細田君（ほそたくん）舌打（したう）ちしながら、

「この暖（あつた）かにコン畜生（ちくしやう）ツ雀（すずめ）百（ひゃく）までと同じ量見（りやうけん）を定め込んでゐながらア—」

稍行（やい）つて突然（だしぬけ）に、

「ソラ蛇（へび）がツ」

「アレー」

「うそだ—紐（ひも）だよ」

「いや—よ威（おど）しちや」

と、半（なか）ば泣聲（なみごゑ）。鳥（とり）も山（やま）も笑（わら）つて見てゐる。

籠（かご）に疲（つか）びれると、女共（おんなども）は「あたし歩いてよ」と勝手（かたて）にのそりと自分（じぶん）で自分（じぶん）を抛（な）り出して出て来て、何（なに）を云（い）ひ出すかと思（おも）ふと、

「あすこの山（やま）まで駈（か）けつこしませうか」

と、妹（いもうと）が細田新婦（ほそたしんぶ）に賛成（さんせい）を求め（もと）める。

「うゝことよ、若（も）し勝（か）つたら？」

「ゆで卵（たまご）子（ひと）一（ひと）ツ」

「張合（はりあひ）がないわねえ—」

と、今發議（いまはつき）して今解決（いまかいけつ）と云（い）ふ仕末（しまつ）、空（そら）ゆく雲（くも）の如（ごと）く總（すべ）ては手（て）ツ取（と）り

早い。

又此麼會話が四人手を握り合つて時始まる。

「東京の町を四人斯うしてしなだれかゝつて歩いたら何うでせう？」

「そりや一遍で擲ぐられつちまうよ」

「逃げたらいゝでせう」

「捉まつたら猶ヒドい眼に遭ふよ」

「ぢや皆麼の手を離しませう」

と、立所に折角組んだ指をバラ／＼。

あまりの景色よさに見惚れた僕は一同を遣り過して日あたりのよ

き芝生の上に控ツかと五尺の體軀を投げ出し、暫しなりとも此の自然の中に瞑想せむと、ヂツと青空を見詰めた、眼は次第にとぢられた、その裡魂は勝手に其處等を遊び廻はつてゐる。

山うぐひすが一しきり耳元で叫いた、驚いて醒めた、皆麼の聲も姿も見えない、大變と帽子を掴むでトット／＼駈け、漸つとのこととで追ひ付いて見ると、「桃から生れた桃太郎に」に他愛もない。「鬼が鳥をば打たむとて」から僕も聲を合はして行く。それは下り坂の元氣のよい時の事である。

登り一里の下り一里、下りは殊に氣持ちがいゝ、平和の神よである。なだらかな道、乾いた運びよい道であつた、先刻から二度も茶

店に憩ひをとつた。茶店は二里の間に二軒しかない、それで充分である。何等の喘ぎもない此の道、籠とは贅澤だ。云ふてくれるな婦女子の爲めである。

湖水が懸て日に光つて見え出した、と直ぐ一もつこ山が指呼された。榛名富士は最初から山の後姿ばかり見せてゐたが、一もつこが見える頃は横になつた。後姿やら横の姿やら正面から見たら何麼美しい顔をしておぢやるやら。

一もつこと云ふは榛名富士の下にこびり附いてゐるのだ。富士山になんとか山が少し邪魔をしてゐる様に榛名富士には此の一もつこが無かつたらさぞやと思はれる。それには御尤も次第の傳説があ

る。

昔し山造りの神さまが一夜中に榛名富士を作り上げようと仕事にかゝつた。神さまのする事だから早い、見る／＼裡に山は仕上げられた。所が少し形の悪い所があつた、それを直さうとしてゐる裡に夜が明けたのでその土を置去りにした、それが一もつこであるんだ相な。

誰れの作り事か知らぬが旨いことを云ふたもンぢや、僕は再び「あれが無かつたら」と呟やかざるを得なかつた。

榛名富士の朝夕の鏡とも云ふ可き榛名湖には鱒が澤山ゐる、その種は最初中禪寺湖から生かして持つて來て放つたものだ、今では幾

萬とゐるんである。その外鮒もゐる、鯉もゐる、食膳大に可なりである。冬になると氷が一尺五寸位の厚さに張りつめる。さらふが轉ばふが自由自在、スケートには持つて来いである。何故それでは人が来ぬかと云へば非常に交通の便利が悪い、冬は殆んど人通りが無い、それが爲めである。冬になると萬目みな白皚々で山も木も林も總て雪を以つて埋まつて了ふ。そして道は悉皆山から平等に雪に蓋はれて歩けたものぢやない、どうしたつてスケートには駄目ですア。——話の旨い籠擔ぎさんは話してくれた。

女共は高らかに「若しく龜よ龜さんよ」を歌つて小鳥の囀りと調和させて行く、その裡我等二人の背面もいゝお年をしながら「世界

のうちでお前程」

「歩みの鈍いものは無し」

「鈍かないわよー」

と、一散に目差す旅館に駆け出す。旅館はレーキホテルである。ホテルと名付くる程あつてざつくばらんな洋館作りである。その家のみ他よりずつと高臺にある。湖水の岸際に民家旅館併せて十軒もあつたらう、レーキホテルが眺めは一番よさ相である。その代はり岸邊より少し離れてゐる。

前振れをしてあつた故かチャンと身姿を揃へて待つてゐる、靴を投げ飛ばして二階へドヤ〜と上る。そして湖水に面した廊下の椅

子に腰を据えた。閉めてあつた硝子戸を「寒いでせう」と氣使ふのに頓着もなしにサツと開ける。

「オ、湖畔！あたしあの湖畔にキツスがして見たい、お前の色は全で青ルビーを溶かした様だ」

と、妹はとんだサロメを發揮してバタ／＼音させて駆けて行く。後の皆んなは疲れてゐるから、黙つてニヤ／＼見送るばかり。應て妹の姿は湖邊に擔いである小舟の櫓に現はれて其處に戯むれてゐた子供と早やお友達になつてゐる。その姿の美しさ、天女の天降りませる様だ、白い顔と眞赤のけだしと紫の着物と山の黄色と水の藍色の此の四ツの色つたらない。

彼女は斯うなると一二もなく湖畔の美人である、ゲータだつたら旨い詩を此麼時作るだらうと思ふた。何うして僕の妹は彼麼に美しいのか知ら、色の白さ、鼻の高さ。

試みに一同口をつぐむと、所謂静かなること林の如しである。海抜何千尺だらう時々ピリツとした冷めたい風がスツと撫で、行く度にブルツとする。夏になると澤山のお客がお出でになりますよと先刻籠屋に云はれたのも此の時成程避暑には持つて來いだ哩と思ふた。

「何故此麼高い山に水があるんでせう」  
と、細田若婦人は細田君に訊ねてゐる。

「それはね恰もそれお腹の中に水があると同なじさ」と、淡泊やつて退ける。妹が戻つて来た。

「あらごらんよ、ごらんよ鳥が雄雌でゐるわ」と、妻君の聲の下から、

「その鳥の乙な仲を引割いて旨さうに喰ふ人間は慘酷だよ」と、人間が人間排斥論をオツ始めるんだから遣り切れやしない。

その裡注文の鳥料理、鯉のあらひ、名物しぐめのお汁が出る。空腹だつたので一同物も云はずに口を動かす、少しお腹が出来て来るとそろ／＼混ぜツ返しが始まる。

「頬べたに御飯がついてるわよ」

と、妹が云へば、

「いゝえ、御はんが頬べたに附いてるんですよ」と、細田若夫人はしツべい返しする。

「せめて食事中なりとも静寂を旨として喰べる可し」と細田君の折角の提議が、

「仙人みみたいな事云ふのね、好かないわ」で代無し。

「ぢやあたしは空々寂々で喰べるわ、いゝこと」  
「それ喰ふ／＼ジャク／＼」

など、粉微塵にされて了ふ。いや賑かなこと 妹 最も旺盛也。歸ることになる、女は例に依つて籠に載る。



今度は少し疲れてゐる男共から苦情が持ちあがる。

「詰らねーなア、女は籠に載つて僕達許り歩くなんて、つまらねーなア」

「つまらねーなア」

と、僕もこぼすので何時しか二人は歩調もおくれて籠と遠ざかる。女共は淋しいと見えて、

「つままる様にして上げるから早く被居いよ」

それぢやと駈け付け、つままる様にしてと強請むと、赤ンベーとくる。再び二人は鼻をつき合はして「つまらねーなア」

時ならぬあでやかな色彩と得ならぬ香りとに行く人も過ぎ行く人

も立止まつて、美しさう、妬ましさう、屹度一生涯の裡に此度の妻に持ちたいと思ふてるんだらう、ぼんやり魂をとられてゐる、夢みちや不可ねえよ。

下りの一里は獨り出に足が前へ出るので、姫君御令夫人達は白い脛を叩いて歩き出したお蔭で存外早くはかどつた。伊香保の入口まで来ると、妹「オヤ」と喜ばしさうに小さく叫んだかと思ふと、

「オーマイデイヤ、キヤラメル」

と、云つて菓子店へ飛び入り、

「お先さへ行つて頂戴よ」

本氣にしてそれぢやとズン／＼三人は行き出すと、

「待つてゐて頂戴よ」

と、口一つで翻弄することく、聽て出て来て、「あたしの舌は活殺自在ね」に開いた口も塞がらず。そこへボンとキヤラメルを投げ入れ、

「全で郵便箱みたいだわ」

は忍入つた。

○

幾程景色がよい所でも獨りたびの時には其等の總ては何んとなくセンチメンタルに刻んでくる、反對に幾程凡々な所でも多勢でワイワイ云つたゐたならば其の土地は何んとなく晴れやかに見え、よく

見えるものだ。若し自分が一人であつたならば此の伊香保は存外涙を誘う温泉であつたかも知れぬ。眺むる總ては悲しい想出の種となつたかも知れない。あの優雅な山の姿も、雨の様な音のする湯瀧の音も、時々湧く三味のつまびきも。

今日の僕には總てが笑つて見え、我が爲めに興を添へてゐる様に思はれた、伊香保ほど面白い温泉はない。

げに小説のモデルになるには持つて來いの好地である。萬目みな打てば響く様な詩趣が横溢してゐる。暖かい春にして此の寒さだから夏の涼しさ、人出が思ひやられる。海拔三千尺の有難味は此處にある。

旅をするなら大勢である、幾度繰り返へしても繰り返へし切れな  
い。爲めに伊香保は躍つて見える、又第三者として見て批評しても  
洵に好箇の温泉地である。伊香保こそ全く期待に反して趣きが深  
い、犬丸君が新婚旅行をするならと云つた言葉が始めて又も確かに  
首肯された。

彼がひとり旅ですら左様思ふたんだもの、風趣の妙味非凡なるは  
偽りは無い。都近くに此の別天地ありしとは!!

蘆花先生はい、所を背景にしたものだ、先生も亦つくづく詩情を  
感じて「此處を天下に紹介すべきは」とやをれ筆をふるつたんだら  
う、僕は氣の弱い一二もなく猫撫聲を出す武雄みたいな泣味噌軍人

も厭ひだし、ヒステリに近い浪子みたいなゴホンくの避病院面も  
平に御免候へである。殊に武雄みたいな男は我が帝國の軍人の面汚  
しである。ウンと力一杯に脊中をドンと打つて「武雄ッ、貴様は軍  
人であるぞ」と怒鳴つて見たくなる。それが爲めに伊香保まで厭氣  
がさしてゐたことは前にも述べた通りである。

伊香保だけは認めて遣りたい、放して遣りたい、さらひな「不如  
歸」と云ふ小説から離して此れを見たい。此の好書題!!己れはサツ  
パリした、伊香保に對する悪感情もサラリと失せた。これからは何  
事もなく「伊香保、伊香保」である。萬人に推稱して憚らない。

僕等の滞在中は不思議な位天氣がよかつた、微風だになかつた、

春の光りは永劫なれと許り暢かな柔い日あたりであつた。

宿の人の話に依ると、夏になると全旅館と云ふ旅館は人を以つて埋つて了ふさうだ。涼しさに夏は知らぬと云ふ。涼風萬解友と語り、愛妻と密語交はす夏の伊香保はさぞと思はれる。

「遊ぶ、いざよ吟め、いざよ瞑想せよ、詩の温泉伊香保が爲めに。」

◎伊豆伊東

再び靈岸島から汽船の人となつた。

今から伊豆伊東を目的するので御座る。汽船は有難いことには毎日出る、だから別に日取りを定めなくても、そら氣が向いた、そら出

發と定めた。午後九時發と云ふ、何故大島行きにしる伊東行きにしる擧つて夜船を出すのか知ら。晝だと波が荒れて夜になると波靜まると云ふんか知ら。其廢事があるんか知ら、誰れからもイエース然りと聞いた耳持たぬぞ。

例に依つてひさ苦しき汚ない乗客、この前は二等に乗つて大威張り、今日は一番「さてく人は見かけによらぬもの」と思はせて遣る爲めに故意と三等を選んだ。一圓二十錢とはお安いものだ。

三等は殆んど酔し漬めであつた、身動きもならぬ、かと云つて眠られぬかと云へばお互に無禮講は不文律、他人の身體は自分のものと或は股の間に首を突き込み、或は腿を枕にグウク、或は他人の横

ツ腹を空氣枕の様に心得て、いゝ氣持ちになつてゐる。それで怒らぬから妙だ。

僕は爺の足を枕にした、時々重さに堪えかねてかムツと振り落さうとして足を側へ遣る、よし其廢事するならと其の空地へのびやかに首を横へる。すると奴さん足の遣り場に困り果て、再び寄越す。それ見ると又枕にする、一切は無言の儘に行はれるんだから面白い。

便所へ立つ時なんか手を踏み足を踏み、時としては頭を蹴つて行く事がある。大抵は黙殺してゐるが、中には「アッ」と叫んで顔を歪めるものがある、其廢事は「ごめん」と云つて立所に仲直りが成立す

るから、汽船の中では法律も何も入らぬ。

汽船は翌午前八時半伊東に着いた、漁船が多かつたので漁業が盛んだらうと解り切つた事に感心するんだから頭が悪いテ。

伊東旅館へ入る、鐵道院の旅行案内の赤紙の廣告頁に「一等旅館玉突設備伊東館」とあつたからだ。ひとり旅の者には此玉突設備がピンと來た。せめて此廢事でもして氣を紛らさなくちや堪つたものぢやない。拙手の横好きだがお江戸仕込みだ。球勢が垢ぬけしてゐるぞ。どの廣告を見ても伊東には茶代廢止と書いた旅館がない、だから此處を選んだんだ、モ少し旅客の懷具合を考へて、開化けた捌きをして置いてたも。

湯はさつぱりとして心地よかつた。一睡の後ブラリと散歩と洒落る。そして驚いて歸つてきた。

伊豆と云へば片田舎の蕭々を聯想してゐた、だから伊東は如何に港とは云へ高が伊豆の片村邊避に過ぎぬと思ふてゐた、なんの温泉があつてこそ聊か人に知られてゐるなれ、なんだと許り足下に見てゐた。所がこれこそ豈に計らひやである。思ふてゐたより遙かに賑かなのと整頓してゐて、全くオヤ／＼であつた。言葉も高慢シヤクレたお江戸酷似である。うか／＼侮蔑の色を見せるなら反對に蔑視される。流石はペルリ提督に訪はれた下田に近いだけあつて開化けよりも機先を制してゐる哩。

毎日東京との間に汽船の往復があるので何時しか見真似見倣ふんであらう。大島と違つてお江戸者を珍らしがらぬ程云はゞ交通が發達してゐると云はねばならぬ。

伊東の海上二里餘にあつて初島と云ふがある、此の島にこそ涙のにじむ様な憐れなローマンスがある。

昔し初島に鬼も十八番茶も出花の妙齡の處女がゐた、それは珍らしい程の美しい縹緞を持つてゐた。何分年頃の處女、離れ島の淋しさに青春の血汐は何かにあてがれてゐた。

伊東に呉服店の手代があつた、手代は主人の命を受けて時々此の初島にやつて來た、そして此の處女の家をも訪ね、何かと云つて着

物の柄を見立てた。處女とも言葉を交はした。

男の來るのは月に一度であつた、處女はなんとは無しに其の男が待遠しかつた。或時には濱邊に出で、チツと仄かに見ゆる伊東の町を夕日の沈むまでも見入つてゐる時があつた。

處女は男に依つて様々の浮世話に耳を傾けることが其の男を待つ最大の原因であつた、それが何うした心の狂ひか其の男が慕はしくなつて來た。時々夢にも見たり、幻にもえがひたりして男を想ふた。男も美しかつた。日を古る度に彼女は物狂はしくなつた。

果然彼女は男に戀をしたのである。純血の島の處女の戀は熾烈であつた。何時しか二人は深い仲になつて、忍びやかに甘い呼ぶに醉

ふてゐた。

島には掟がある、若し男女が不義を働けば、諸共之を離卷にして海に投じて命を絶つて了ふのである。處女は勿論其の掟を知つてゐた、けれども掟を恐れなかつた、男の愛の移りを恐れてゐた。

男も女を戀してゐた、一度來るものは二度二度は三度と月毎に島を訪ねることが多かつた。そして互は燃え立つ若き血汐の奔亂に酔ふた。

來ては男は又忍びやかに島を離れて行く、その時の處女の悲しさで無かつた。舟の暗の中に消えて行く時身を震はして悶へた、そしてグナリと倒れた儘男を乗せた舟の櫓の音に僅かの慰みを見出して

長く／＼去らなかつた、男が向ふへ着いたと思ふ頃處女も始めて家路をたどつた。

何時しか島の若衆に肝付かれた。彼等は燃ゆる嫉妬と愼恚の怒りを以つて若し今度二人の仲を見付けたら籬卷にするとか藪の眼鷹の眼で様子を窺つてゐた。老人共も「おのれよくも」と同じく睨んでゐた。

二人はだから逢ふ事が出来なかつた。處女の悲しい日は續いた。彼女の全血汐は今や戀の爲めに逆まいた。命も魂も男の爲めならと或夜遂に逢ひたさ見たさに堪えかねて暗に乗じて伊東目がけて舟を出した、そして寄せくる波も物ともせず唯男一念の爲めに漕いだ。

だ。戀の一念は遂に届いた。

それからの二人は又もや逢瀬を重ねてゐた、それも遂に判された、島人は悉皆舟と云ふ舟に悉く錠を附した、そして舟が離れぬ様にして了つた。

處女は又悶へた。戀は再び彼女を決然立たしめた。或夜密かに家を抜け出で、岸邊に來たり、稍暫し遙か彼方なる伊東の方面を見入つてゐたが、そのうち何思ひけむサツと海中に身を躍らした。そして折柄の月明に雪よりも白き肌を閃めかして拔手を切つて泳いだ。天の護れるか、海神の守護によるか見よ彼女は無事に伊東の港に姿を現はした。二人はそれから斯くして戀を呷いた。その時今後若



し逢ひたさの時には夜濱邊に出て男の方で火を焚くから、それを合  
 圖と思ふて来てくれ、火の氣がない時は都合の悪い時か、さなくば  
 狂瀾逆まくの日だと思ひ飽きらめてくれとの事であつた。

處女は毎夜濱邊に出で、伊東の彼方に眼を張つた、毎夜火は上つ  
 た、女はそれを目當てに憶せず男見たさに泳いで行つた。そして人  
 知れず呷きを洩らした。

この事が今度は伊東の港の若者に發見かつた、若者は妬むだ。

ある大あらしの日であつた、海は荒れに荒れ山なす波は物凄く岩  
 を噛むだ。

妬むでゐた若者は濱邊に出た、そして密かに男の爲す如く火を焚

いて合圖の狼火をあげた。

女は遙か初島にゐて其の火を認めた、男が此處荒む日にさへ自分  
 に逢ひたいのかと男の心を嬉しく思ふた。

時に空は電光り、風雨亂れ、狂瀾空に躍つた。その荒れ、其の凄  
 愴なる海を物ともせず彼女の玉なす白肌はザンプと怒濤に躍つた。  
 戀の一念、男見たさに。

あはれや翌期彼女の蠟の如き死體は岸に横はつた。

○  
 僕は肉が搔き撈られる様な哀れさで胸一杯になつた。此の様に熱  
 烈な戀が世の中にあらうか。なんと傷ましい哀れな最後ではない

か。僕は芝居を見て真に可哀想に思ふ半面に處女の戀の極致として何日も涙ぐむのは八百屋お七の幕である。あのいたけない程初々しいお七が戀人見たさの一念に重い刑を物ともせず捻を破つて半鐘を亂打した時の氣持ちは何うであつたらう。腸を千切られる様な可憐さに打たれるのである。

今此の話と照り合して見ると、何處となくそっくり似合つた點がある。

僕はいつ迄も〜拱いだ儘岸邊に立つて此の哀れな物語の初島と伊東を放さなかつた。

初島！名からしほらしい優しい。どんな女だつたらう。現に今此

の自分の立つてゐる此の岸の此の砂に其の尊き戀の犠牲の美しき姿が横へられたのでは無いか。

此の砂だ。

僕はグイと掬つた。そして懷から出した紙へ大事相に包んだ。

◎熱海と伊豆山

伊東から熱海へは徒歩でも船でも。然し僕は船とした。

それは景趣そゞろに慰むるものがあると云ふなら兎に角だが、五里の道何等見る可きなくその癖峠とは癩の至りだ。それよりか海風徐ろに吹き來たる甲板上にありて怒濤巖を噛む海岸を見て熱海へ出た方がずつと利巧な處置では御座らぬか。

汽船は朝の五時半と午後の二時に出る。朝寝坊の僕に五時半は身體に障る、旅は暢かなもの自由なもの何を好んで馬鹿め早朝を選ぶの必要あらむやと妙な所に額に勝手に青筋を立て、二時とした。五拾錢也。

若し自分が始めての旅であつたならば、否此の度の旅行に伊東が最初であつたならば此の海岸の風趣は存外氣を引いたかも知れないが、チと遅かつた哩。己れはもう海の景には飽きかけてゐる、よほどの趣き無くちや、これぢやち相手にも出来ねえ。

富士屋を宿と定む、宿望遂に達す此家こそは茶代廢止とさてるからウエルカム、ウエルカムにて候ぞ。

熱海は名の示すが如く熱い海である。高くもない山と山とに圍まれてゐる分際で海もないものだ。さア何處に海がある？ 尻捲くるぞ。聽けば熱海は冬の天地であつて、冬になると諸國から一時にワツシヨ／＼と乗り出して来るが、夏になると「こりや堪らぬ逃げる逃げる」とひつそりして了ふ相である。愚か者がゐて温泉とさへ云へば何處でもいゝ様に心得て時折風來坊がのそ／＼遣つて来る、そして身體中を汗にして「なんと云ふ温泉だ」とブリ／＼して一晩で着物擔いて逃げ出すとの事、其麼頓馬者を噴ひ出して第一に湯に浸つた、湯と云へば此處は間歇泉である。

僕は東京出發の際友人に此麼事を云はれた、それは熱海みたい

な詰らぬ所で宿をとるのは馬鹿の骨頂である。それよりか熱海と並んでゐる伊豆山温泉場に宿泊つた方が何麼にいゝかも知れぬ。伊豆山には名高い相模屋の千人風呂がある、行くならそこだぞと注意された言葉が當に領收候也で確かに合點仕つた。

熱海は詰らない、簡にして至つて要領を得た言葉である。名こそ宇内を壓倒してゐるが、冬の故だらう、冬來ぬのだから冬の氣分が出て來ぬ哩。いゝやら、悪いやら。よし僕も同情して冬はいゝと假定丈けは興へておかう、然し一步外へ出てなんの見るところがある？唯湯に許り浸つて居れと云ふのかい、若いものにそれが堪えらる可きでありますか。チとお考へ遊ばせナ。

倉皇として熱海を切り上げて半里もあらぬ伊豆山の相模屋へ。何かと申すうちに早や相模屋で御座る。全く妙だ、それは山の中にあつて熱海と云ひ海にあつて伊豆山と云ふ、何たる矛盾だらう、この矛盾を矛盾とせぬとは遊び場所だけに頭腦を悩ます必要もないんだらうよ。

伊豆山温泉は海とぴたりと呼吸を合はしてゐる、それ程海の近くにある。だから枕頭かすかに濤聲を聞く所ぢやない、枕頭控々眠られずである。恰も波の中に眠つてゐる様なものである。だから眞に海を慕ひ、波の音に夢を結ばむ心のものは手を舉げッ、伊豆山へ引張つて行つてやる。

相模屋は大きい旅館だ、然し千人風呂に千人入れると思ふたら眞赤の偽の皮だ。大きいは大きい千人とは倍も業山な。これぢや支那の垂涎三千丈を笑つたものぢや無い。正味の話がギツシリも少しお詰め下さい〜と無理矢理に入れた所で百人位だらう、但し百人も入つたら湯の中にあつた湯は何處かと探さにや成らぬ程失せて了ふだらう。

伊豆山は氣に入つた。

何故萬人に氣に入る伊豆山が左程に人に知られないで、氣に入らぬ熱海が彼麼に喧ましく云はれるんだらう？  
判らない。

だが僕は春夏秋冬の氣候關係を度外視して兩者いづれかと云へば伊豆山を推稱する。

熱海曰く「擲ぐるぞ」

もう止さう。

### ◎飛驒の山水

(富山を起點として)

一體我輩は之れ迄いざ明日旅行と云ふ其の前夜は必ず眠られ無い。だから當日に成つて身體の勞れる事夥だしい。面白く無い事だ。其處で從來の方針を變へて思ひ立つた時にブイと出掛ける事にした。

此の一日何か氣がユラ〜して尻が落付かない、それ今だツと

俄かに支度をして飛び出したが、さて火急とて祿なことがあるものぢや無い、時計を忘れる、洋傘を忘れる、然し斯うして突嗟に出掛けた旅は、それ足袋、それ雑囊と家内を叱り飛ばして、左様なら、早く歸つて頂戴なと浪子式に別れを惜しまるよりか却つて愉快である。

汽車の中では獨りポツチ、話相手も居らねば此方から誰れにと話し掛けようともせぬ。

僕の前には二人の紳士が座つてゐる、其の話しがまた面白い「僕ね君知つてゐるだらう、子供が澤山出産て困るんだ、數へて早や八人も居る、六人目の時此れでもう降參だ、留めて置かうと留吉と名付け

た、所が又出産た、いまくしいと思ふて又吉と名付けた。暫らくすると又もやボンとふくれ出す、妻君を叱り飛ばすと出産るものは仕方が無いと云ふ。生れた子には末吉と命名して、之れで南無三大明神と神様に御止めを願つた」と云ふ、瘦た男だが仲々精力主義だ哩。

富山市からゴム輪で明外れの馬車場まで走らす、思ふたより遠くと思ふたより安價かつたから大枚五錢の増しを遣ると、頭をベコベコ下げて御禮を云ふ。

馬車は何處も同じガラクタ物也。乗客は商人二人に女一人、彼方側には素性の知れぬ其の女が座つてゐる、其處へ目のキヨロキヨロし

た五十餘りの親父が後れて這入つて来て其の女を尻目にかけて乍ら遠慮もなく「御前大かえお尻してるナ、其の尻も一寸引込ませ」女はツンとして餘程癢に障はつたものか「大かえ尻は引込ます事は出来ません」只者ぢやないらしい、「馬鹿、己れの座る所が無い、其の荷物を下へおろして詰める」女は知らぬ顔してる、親父は無理に座を占めた、大かえ尻は相變らず親父の方に向いてる、餘勢を藉つてプツと吹き付けたら面白からう。

富山から大久保迄は實に凡々なる道で是非嫌でも應でも馬車の力を借らねばならぬ。(最近輕鐵できたり)

大久保から道は神通川の右岸に沿うて山の麓を走る、笹津から景

は一轉して漸く神通川の特徴を現はし、景は面白くなる。けれど要するに平凡だ、然し此の平凡は上流と比較しての平凡であつて通常人の目からは確かに非凡と云ふ可き資格がある。庵谷から始めて神通川の神通川たるを示す、其の間、道は知らず／＼高く成つて山中腹を縫うて行く、河は遙か眼下を流れるが、人間の幾萬倍かの鬼が水も滴たる大刀をひツ下げ、眞向上段に構へヤツと切り下ろしたやうな大山の褐色の切目と、青い苔蒸す岩の間を、水はごう／＼と流れるんだが、何分幾百尺の高い場所から見下ろすんだからユタリユタリと流れてる様に見える、全て藍の布でも敷き延ばした様、白い泡立ちは其の布の綾模様過ぎない。景の雄大なること、怪岩の

奇なること、水の清々しいこと幾多の山河を跋涉した僕には未だ嘗て之と比す可きを見ない。

富山から八里程に蟹寺と云ふがある、神通川の支流高原川の交互點で、此の合したのが暴れ出すと富山市が直ぐ「助けて！」を叫ぶんだ。

東からと、西からと、北から迫る大山脈が此の川の爲めに三ツに別たれる、この街道に國界橋と云ふ眞白いく〜奇麗なく〜橋がある、此の橋を渡ると飛驒だ。欄干は實に天下第一の絶景を眺る得る好場所、奇岩奇石の巨大なる、水の流れの面白さ、石飽くまでさびて一種神々しさの念に打たれ、神の居ますが如き心地して、俗氣紛

紛たる者も自分を忘れて呆とし、一層飛び込んで此の偉大なる絶景と同化したい感じがするだらう。橋側の一茶店名勝亭に憩んでると、黒く逞ましい男が大なる魚籠に鮎の尺大のを無数に入れて這入つて来る、此の家の主人だらう、丁寧に僕に挨拶しておかみさんに鯖の如き鮎を焼かせ「御客様、召上げれ」と薦める、眼前の景勝を酒とし、鮎肴としてバクッ附く。旨いこと、旨いこと、其れこそ頬が落ちさうだ。

主人一杯きこしめして蟹寺の由縁を語り出す一段、さつと斯うだ。

昔し此の川に壘一枚程ある甲の大蟹が居て、馬牛などを使つて石



山村の石山寺の和尚を喰ひ殺した、人民は何うして和尚が無なつたのか解らぬ、其處で又代りの坊さんを送る、送つた翌日何時の間にか行方が知れぬ、又送る、又遣られる、村の者は長い間鐘の音を聞く事が出来なかつた、其の内遂々蟹の仕業と知れたが、誰れ一人己れこそ其の寺の僧を勤めようと云ふ者が無い。

或日一人の行脚僧之を聞き何んと思ふたか己れが其の寺へ入らうと云ひ出した、危ないから止しなさいと留める者もあつたが、和尚は聞き入れぬ。平氣の平左で寺へ入ると、味噌、米などが皆用意してある、有難しとそれを喰つて待つてると、仲々化物は出て來な

50

夜は森々と更け渡つた丑滿の頃、ミンリ〜と堂が動きだす、來たぞツと眼をクワツと開くと、形容の出来ぬ恐ろしい者が「東妖山の化物ぞ」と口を開いて來る、和尚平然たり、すると、何時しか其の姿が見え無くなり、再び森とする程物淋しく成つたかと思ふと又ガラ〜音がする「我れは東から來た妖怪ぞ」と例の如し、和尚ニタリニタリと笑つて應ぜぬ、來る奴も來る奴も此の和尚に撃退された。

翌日朝霧を破つて寺の鐘が殷々轟々鳴り出した、村人はサテは豪い坊さんと賞め稱へる、其れから蟹は再び出ない、出られちや困ると石山寺の名稱を改めて蟹寺とした、富山には今其の蟹を祭つてあ

るが、甲の中へ米が三斗五升入ると云ふ。

之等は傳説であるが傳説は傳説として聞き逃がしてはならぬ。

川に依つて三ツに別たれたる山脈の一は百萬石の前田侯の領地、

一は十萬石の佐々成政の領、一は三萬三千石の天領（天領とは徳川

の領分）此の三つが睨み合して番をしてゐた所が蟹寺のある所だ。

天領の者共は徳川を笠に着て威張り散らしたが、之れには前田、佐

佐の侍齒嚙みをして口惜しがつたが、何うする事も出来ぬ、可愛

さうな者だと、親父全で見て居た様な話振り。

其の頃此麼橋なんか無かつたものソレ／＼御覽ぜろ、人を籠に載

せて籠渡をしたものだと寫眞を出して見せる、昔の繪師の書いたの

を更に寫つてあるんだ。

此の蟹寺から上が益々目を喜ばせる。もう飽く程だ、僕は鯛の  
淋しく泣く聲に送られ、直ぐ眞近の峰々を折柄の夕陽に色彩られて  
黄金色に成つて走る雲の妙を仰ぎ見ながら、緑濃き山から山へと  
指し懸つた虹の橋の下を潜つて東茂住の宿へ着いた。

翌日例の通り歩きだし元氣に任せて一休みもせず三里も來ると足  
が一寸疲れた。道端の茶店に腰を下すと、女主人がイン／＼出て來  
て「まア汚ない所へ！其處は穢なら御座います、旦那様どうぞ此方  
へ」と疊の新しい小綺麗な所へ導く。高が貧書生、旦那様と見ら  
れたは運か不運か。「此處でいゝよ」と云へば重ねて「貴所方には勿

體無い、どうぞく」

勿體無いとさ、こりや茶代はドツサリせしめられる、困つたと思ふたが仕方が無い、其れぢやと其處へ座ると、女主人は折柄娘が掬んで出す茶を一寸覗き、此麼茶をと叱り附けながら自ら奥へ入つて龜の子より大事の茶壺を取つて来て、今の茶を外へブイと捨て、入り代はせて薦める、ひなに稀な菓子を出す、お愛想が中々いゝ、思ひ切つて茶代を奮發すると、わざく二町程送つて来て「御道中お大事に」と懇ろに挨拶して去る、金の利目は何處も同じだ。

三日間三井神岡鑛山で休養した。雨が降つたからであつた、親しく製鍊所、採掘所などを観察する筈だつたが、雨の爲め意の如くな

らぬ。

我輩此處で一寸述べたい事がある、外でも無い飛驒とは什麼所か？

まだ飛驒を知らぬ人は飛驒なる國は餘程恐い所の様に思ふ、狼でも大蛇でも居るかの様に考へるが大なる過りで、富山から飛驒を横斷して岐阜へ出る迄人力車が通るなんぞとは夢にも知るまい、來て見て第一に屹驚するは之れだ。そりや奥へくへ行けば何處の國だつて狼の一匹や二匹は居るだらう、僕の云ふのは道のある所斷じて斯かる物が居ないと云ふのだ。

人柄が至つて淳樸で、加之に親切で叮嚀で言葉が美しい、野卑

でない。馬子の馬を可愛がる事決して叱咤したりしない、荷車の多くあるにも驚くだらう、何分山國で氣車が無いのだし、其の上都の高山は丁度國の真中にあるんだから岐阜へ出るにも富山へ出るにも交通が至つて不便だ、荷車は飛驒の生命である。

幾程歩いても四方山だ、何處迄行つても四方山だ、此れが飛驒の特色で飛驒の飛驒たる所以でもあらう、だから平地が至つて少ない、米が取れぬとなる、この米を富山から盛んに輸入する、中流以下の者は馬鈴薯を常食として居るも無理は無い。

日中の暑さは敢て大差は無いが、偶に吹く風が至つて冷たい。ヒヤリとする。勿論高地であるからだ。又朝晩も寒い。蚊帳なんかも

釣つても釣らなくつてもいゝそうだ。美人が多い、斯う云ふと、當地の所謂紳士なんかステッキ擔いで飛び出すかも知れん、お鍋どん式の女を見出す事が出来なかつた、大抵は色が白うて瘦形である。だから鄙に稀れなると云ふ字は一寸使へない、何故白いのかと云ふと、高地で寒い故もあるが、も一つ原因がある、田圃を作ら無いからだ、養蠶を盛んに遣るから外で日を送るより家の中で日を過す方が多い。従つてと云ふ譯だ。

風儀のいゝ所で高山にも船津にも藝娼妓は居るが、此等は主に名古屋、富山地方より入込んだ者で土地の者は殆んど居ないそうだ。以上は一昨年視察し、見聞したんだが今度又再遊して猶更真であ

ることを確めた、兎に角奥床しい國だ、なつかしい國だ。

神岡鑛山取締役小田工學士の好意に依つて僕は坑内監督者中垣氏の案内で此の内部を視察する事が出来た。一體此の鑛山は三井の設計にかゝるもので竣工に三百萬もかゝつたと云ふ大規模で、役員等總て二千人も居るそうだ。

泥に塗みれた工夫服を着て汚ない帽子を被つてカンテラを燈して持つた時には自分ながらオヤ眞實の工夫に成つたんぢや無いか知らと思ふ程巧みに化けられた。通常着で麥藁帽を被つた僕に惚れた女があつたとしても、此の姿を見た時には愛想が盡き果て、鐵砲擔いで逃げ出すだらうと思ふ程情ない格好。何故此の工夫服を着ねばな

らぬかと云ふと、中へ入つては什麼晴衣でも一度に汚れるからだ。

「ちや之れで可いでせうか」と傍らの水瀬氏を顧みると「オツと待ち給へ、襟の中へ水が這入ると不可ないから之で括つて」と新しい手拭を渡される、用意萬端之れで十分也。「さア御案内しませう」と中垣氏が先きに成つて坑内へ導かれる。

第一に感じたのは非常に寒かつた事だ。殊に内部に溜つてゐる水の冷めたいこと、一足踏んでは飛び上がる。這入りがけは避暑する様な氣で居つたが、何うして、そんな生優しいのではない。

坑内のみ總て三里もあると云ふ、只今二千尺の此の高地まで一氣に駆け上がった僕には三里も見せ附けられては堪まつたものぢやな

い。要點丈(えうてんだけ)けで宜(よろ)しいと嘆願(たんでん)に及(およ)ぶと其(その)れなら猶(なほ)都合(ごうご)がいゝですと意(い)の通(とほ)りに成(な)つて呉(くれ)れたからホツと白(しろ)い呼(い)吸(き)を吐(つ)いた。一(いち)里(り)程(ほど)歩(ある)いたが空(くう)氣(き)は少(すく)しも變(か)はらない。中(なか)に溜(たま)る瓦(が)斯(す)は巧(たく)みに通(つう)風(ふう)せられてある。之(こ)れなら安(あん)心(しん)だが、安(あん)心(しん)の出(で)來(き)ないのは工(こう)夫(ふ)がカン／＼働(はたら)いてゐる岩(がん)石(せき)の上(うへ)だ、ヒョツと窺(うかが)めてゐる首(くび)を上げると、大(おほ)きなひびが横(よこ)様(さま)に走(はし)つてゐる。昨(さく)年(ねん)彼(かの)麼(ま)の落(お)ちて二(ふた)人(り)も死(し)にましたよと中(なか)垣(がき)氏(し)は云(い)ふ。見(み)ると成(なる)程(ほど)今(いま)にも落(お)ちそうだ、いゝ心(こゝろ)持(も)ちもしない。カンテラで照(て)らして行(い)く先(さき)々(々)は至(いた)る所(ところ)ビカリ／＼と鑛(くわん)石(せき)が光(ひか)る、金(きん)鑛(くわん)へでも這(はい)入(い)つた様(よう)な氣(き)がする。此(こ)の鑛(くわん)山(さん)は主(しゆ)として亞(い)鉛(えん)、鉛(えん)、銀(ぎん)が産(た)出(で)さうだ、道(だう)理(り)で光(ひか)るのだ。坑(かう)内(ない)の通(つう)路(ろ)は巧(たく)みに出(で)來(き)

たもので繪(え)の通(とほ)り線(せん)路(ろ)まであるが、危(き)險(けん)だナと素(しろ)人(ら)に思(おも)はれるのは内(ない)部(ぶ)の採(さい)掘(くわ)所(じょ)許(か)り。

採(さい)掘(くわ)所(じょ)の大(おほ)きいのに、傍(かたは)らには大(たい)抵(たい)巖(がん)壘(たい)な少(すく)しの装(かざ)飾(し)も無(な)い喫(くつ)食(じょ)所(じょ)がある。屋(や)根(ね)は掘(ほ)り廣(ひろ)められたる岩(いは)に、腰(こし)掛(か)けは太(ふと)丸(まる)太(た)、其(その)處(こ)でムシヤ／＼と鬼(おに)をも挫(くぢ)く大(おほ)男(をとこ)がギロリと光(ひか)つた眼(め)で、大(おほ)口(くち)開(あ)けてバク付(つ)いてる所(ところ)なんか大(おほ)江(え)山(さん)の酒(しゆ)呑(てん)童(どう)子(じ)に宛(あ)然(ぜん)だ。

氏(し)の語(かた)る所(ところ)に依(よ)ると、此(こ)地(ち)の坑(かう)夫(ふ)は至(し)極(ごく)温(ぬ)順(じゆん)で喧(けん)嘩(わ)なんか決(けつ)してしない、然(しか)し儲(まう)けた金(かね)は溜(た)めたりせず、皆(みな)酒(さけ)に使用(つか)ふが、中(なか)には小(こ)金(かね)を貯(たくわ)蓄(ちく)して早(はや)く妻(つま)を迎(むか)へる者(もの)もあるそうだ。

暗(くら)い坑(あな)に二(に)時(じ)間(かん)も引(ひ)張(は)られて漸(やう)々(々)外(そと)へ出(で)ると、全(まる)で地(ち)獄(ごく)から極(ごく)樂(らく)

へ出たやうな気がした。此處は海拔三千尺程あるから割合に涼しい、其の上風が常に吹くから暑さなんぞは感じ無いと云ふ。見渡す限り山又山だ。

僕の歸路についたのは空の黄色く色彩られた夕方であつた、四邊は蒼然としてゐた、遙かの黒青い山から此方の山へ川の流れる様に白い霧が谷間から襲うてゐた、何んとも云へぬ微妙の感に打たれる。月は照つた、あゝ高山の月！一種崇嚴の氣字がヒシ／＼と迫まつた。

翌日工場を見た、採掘した鑛石を完全のものとして送り出す迄の機械の精巧なる矢張り三井は金持ちだ。その内の一部溶石所は實に

此の世の地獄で、其處を見たらとても恐いと云ふ言葉は吐けまい。あの堅い鑛石が見る／＼溶け出して眞赤に成つて全で水の様に瀧の如く流れる、其の中で職工は平氣でパンの爲めに働いてる、同情に値する。

翌日西村夫妻其他の人々に送られて懐かしい鹿間を出發しやうとすると、今年五歳の西村氏の愛兒で正雄と云ふ僕の大仲善しが明日から遊び相手が無く成るので泣きはしなかつたが、斐しさうな顔付きで「小父さんよ！小父さんよ！」と追ひ駆けて来る、餘りの可愛さに黒い手でニツ三ツ頭を撫で、遣ると「ねえ小父様！又来て頂戴よ！、何日来るの？坊やは待てるよ」オ、まだ彼麼可愛い、事を云

ふ。思はず林檎の様な頬にキッスすると「小父さん、汚ない事をするなア」と一生懸命で拭取る、眞に天真爛漫也。

鹿間より船津を通り抜けて愈々獨旅。凡そ旅には獨旅程淋しいものは無い、誰れか話相手に掴まへようと思つて矢先、幸い一茶店に憩んだ時、同じく休んでゐた巡査部長らしいのが居る、之れなら面白からうと行先を問うて見ると、矢張り蒲田温泉だ。

巡査だらうと思ふて切りに警察上の話しを仕掛けて見ると、案外暗い、其れでもテツキリ巡査に違ひ無いと見込んだから無暗に問ひ詰める、曖昧ながら答辯するが、稍もすれば森林上の事を語る、漸漸解けて來ると、何のこつた、い、恭しく差出す名刺を見ると、船

津林務技手林新一とある、我輩の風采は何麼か知らぬが僕に對する言葉使ひが非常に丁寧で全で兵卒の將校に對する様だつた、僕が言葉をかけると、先づ「ハッ」と答へてから何んでも云ふ。一寸面喰つた。

蒲田の温泉は妙な所だ、此方から何にか云ひ附けなければ決して持つて來ない。お愛想なんぞは少しも無い、我輩ぶんくふくれ出すと、林君僕を宥めて「お心苦しうは御座いませうが此處は此處所です。

船津から蒲田に至る村落は主として南朝方の武士が武運拙なく逃げ延びたのが祖先であるそらな。村上天皇行在所と云ふが在つた



が、別に證據があるに非ざれば果して事實として取る可きか取らざる可きか疑問だ。蒲田は餘り賞めた温泉ぢや無かつた。蠅の多い事非常なもので夕飯を食ふ時、菜が蠅か蠅が菜か解らない位。

◎燒ヶ嶽登山 (附上高地)

明くれば空碧瑠璃を磨き出して快極まり無し、蒲田より半里にして中尾なる村あり、名にし負ふ燒ヶ嶽の峠は之れから也。道は峻にして又峻、而も連日の大雨に橋梁流れて道路を遮り、或は又鬱蒼たる草の爲に道隠れて迷ふ事一方ならず。峻嶮あへぎあへぎ登りては汗を拭ひ汗を拭ふては登り幾度か頂上かと仰ぎ見ては失望し、最後の努力、最後の努力と自ら勇を鼓し杖にすがりて進むも、依然とし



口 火 噴 新 岳 々 燒

て達せず、落膽に撞と側らに倒れて憩ひしが、深山の物凄さ鬼もあ  
 らず、熊もあらず、蛇もあらず、何物も恐るゝものとしてあらざれ  
 ど、人影絶えてなく、何んとは無しに凄愴の氣迫り、佇立に堪へざ  
 らしむ。詮方なく又も疲れ切つたる足を進むる其の辛さ、息切れする  
 毎に水をと求むれど一滴もなし、僅かに前夜降りし夕立の雨滴の筐  
 に残れるを玉露を味はふ如く辛くも渴を醫し足引き摺りて進めり。  
 見渡せば直前に白雲を生み出すが如く燒ヶ嶽噴煙を藍青の天空に  
 吹き出せり、嬉しさの餘り總ての疲勞を忘れ、這ふが如くに駆け登  
 る、道壞はれて無きは先般大爆發したる餘勢なる可し、巨木のヘシ  
 折られたるは噴火したる大石の下に壓せられたるが爲めなる可し、

當時の慘狀の激烈なる察しやられて思はず慄然たらしむ。萬目悉く木倒れ、樹木枯れ、至る所白煙を吐きてすさまじとも凄じ、試みに杖にて深く地を刺せば忽ち音を發して白煙噴出す、漸く頂上に辿り着きホツと一息し、我れながら快哉を叫ばざるを得ざりき。海抜實に七千尺、僅か二時間の後に達せる也。我れ常に山に登ること平地を行くよりも心地よき也。一步登れば勿論一步の苦しみあり、されど又一步の愉快のあるなり、眼界の漸次展け行くには非ずや、人嘗て余を野猪の如しと評せり、ソは山嫌ひの言葉也。われ何ぞ斯る輩と山水を語るの愚をなさんや。一散に駈け下りたる所に一軒の宿あり、音に聞えし上高地の温泉なり、主人驚きて何處より參らせ

しにやと問がまゝに蒲田よりと答ふれば、さてく御足の早き方かな我れ此處に宿を始めて年あり、未だ嘗て斯る方ありしを見ず、そも何時に出立れしぞと重ねて問はるゝに、今朝七時なりと返答すれば驚嘆の目を張りて七時は誰れにても常なるに、さてもくと三度び讚嘆の聲を放ちぬ。時計を見れば十時半也。僅か三時間半を以て日本一の峠を上下せるは我れながら痛快なる哉。

人若し避暑の最上の地をと問ふあらば我れは直ちに上高地と答へ

呼べば應へひとする穂高の一萬尺、燒が嶽の七千尺、兀突聳ゆる蓮華の峻峰は欄干に倚りては双眸に收められ、地下より沸出する鑛

泉は滾々として清冽その比を見す河水飽く迄も清く飽く迄も冷也。氣候暑からず寒からず。附近田代、宮川の池は幽雅にして寂、風景共に佳絶也。

雄大、莊嚴の字句未だ以て上高地を形容するの言葉に非ず。神秘仙境の好字も亦之れを盡さず、あゝ上高地は遂に我が意を得たる地なる哉。

主人の語るを聞くに焼が嶽大噴火の際には白煙變じて黒煙となり、凄まじき音響を以て山唸り、巨岩の落下する音手に取る如く聞え、一天俄かに搔り曇りて暗黒と成り、日中猶ほ火を點じて辛くも用を辨じたりと云ふ。

翌日天候いと怪しく見えけるが、果して上高地を發して一里餘、一二滴帽を打つよと見る間もあらせず、大雨沛然として降り灑ぎぬ。避けむと欲すれども道は峠にして目的地島々に至る迄一の村落なく、一の小屋なく、避くるに所なきを如何せむ。取急ぎて雨具の用意なかりしを如何せむ。空しく逡巡せば立所に濡鼠となり、凍死の悲運に遭はむと、奮然意を決して先づ「シャツ」一枚となり、上衣と「ズボン」は確かと丸めて結び付け、雜囊は又「タオル」にて之を蓋ひ、麥藁帽を雨具として駈るが如く登り登れりさる程に雨脚益益猛烈を極め、僅か二丁餘を行くに「シャツ」早くも濡れ、帽子の帯は色を溶かして雨水は青滴となり、取り止めもなく手と云はず、頭

と云はず、胸と云はず腹と云はず、染めずんば止まざる勢ひにて  
灑ぎ立ち灑ぎ立て、紺屋の瓶より這ひ上がりたるが如し。括りたる  
服、雜囊皆雨を通されて一品の濡れざるものなし。

何より余を恐怖せしめたるものは寒氣也。あゝ地は海拔幾千、風  
既に冷也。加ふるに此の大雨の烈しき、凜烈骨に透るを覺え先づ凍  
えて杖を握む手の有無を感ぜず、黒褐色の皮膚は變じて蒼白とな  
り、死人の如く見えたるは我れながら心細き限りなり。大聲擧げて  
放歌しては苦を忘れ、微吟しては自らを慰撫して進む。

我れ斯かる悲境にありたるも山水の景は依然として妙を極め、怪  
を極め、壯を極む。島々迄の道路皆川に沿ふが故に其中より吹き

來たる冷氣實に粟を生ぜしむ。

蠻勇と元氣と根氣を以て漸く島々の村に凱歌を擧げたる愉快さ、  
忘れむとして忘るゝ能はず、幸ひに頑健なる身心、爐邊に暖を收る  
や忽ち元氣恢復して旺盛元の如し。

◎日本アルプス山下の老獵師

上高地に滞在して居つた時、宮川の池に遊んだ序に四十年も獵師  
生活を送つてる上條嘉門治と云ふ爺さんを某氏と訪ねた。

此の爺さんは日本人よりも外國人に多く其の名を知られてゐるさ  
うな、色黒くして筋骨の逞ましい爺さんである、土産にと持つて來  
た酒と肉の罐詰を與へると、満面に笑みを見せて喜びながら、

「有難てえ、己ら酒好きだ、よう来て呉れたのう」

と、大きな丸太を爐の中へ投げ込みながら、

「お前達イワナを喰はつしやるか」

「そりや珍らしいですな、頂戴させう」

「此れ見る、今取つて来たよ、大きいぢやろ」

と、魚籠の中へムンツと手を入れて掴み出したのを見ると、未だビクビク動いてる。

「お前達何うして喰ふだ」

「そうですね、鹽焼にして貰ひまうか」

「よし〜」

と、ばかり、ヌツクと串で突き通し、斜めに爐にさして焼き、冷酒を茶碗に煽つて舌打ちしながら、

「ウン、旨え酒だ、旨え酒だ、お前達も呑まねえか」

「二人とも酒は駄目ですよ」

「ハ、ハ、そうかえ、そんぢや己れ一人で遣らかすわい、ウム、先日な、△△さんが見えたよ、己りや道案内して遣つた、△△さんは豪い人ぢやのう」

△△さんとは山水通で有名な△△△△氏の事だ。

「何處へ行つたんです？」

「穂高と焼の峰傳ひぢや」

「お爺さんは何時も案内するんですか」

「己れの所へ異人がのう、よく来るだ、ベラベラと己いらの言葉を喋べるだ、異人にも馴れたよ、毎歳来る人も居るがのう、ツイ五六日前、己れン所へ来て、ウイ………なんとか云ふ酒を土産に持つて来たよ、強い酒ぢやたぞ——」

「ウイスキですか」

「ソンぢや、其のウイスキぢや、ソンぢやソンぢや」

爺さんは次第に酒が廻る、僕もイワナの肴を舌鼓打たせながら喰ふ。

「オーツ、お前達餛飩が好きかのう」

「餛飩ですか、好きですともー」

「そうか、喰はして遣らうかのう」

「ありますか」

「ウン、己りや餛飩が好きだで持つて来て呉れたよ」と、云ひつゝ大きな櫃を運んで来る。

「勝手にウンと喰はつしやれよ、青菜もあるが喰ふかい？」と、顔色を窺ふ。

「澤山御馳走がありますね」

「ナ、大した御馳走もねえだよ」

「お爺さんは何が好きですか」

「已れにや好き厭ひ無えだ」

「イワナは澤山取れますか」

「そんぢやのう、日に二百も取れるわ、此の針で釣るだ、毎日乾した奴を貯めて町へ賣出すだ、平均二圓ぢやのう、冬ぢやとな、熊やクラ猪でウンと儲かるだ」

「成程夏は熊も居ますまいな」

「居るもんかい、何處へいつとるか解らんぢや、一體熊は人さへ見ると逃げ出すだ、猿も居るがのう、筈が好きで、今頃は毎日奥へ喰ひにいつとるだよ」

「熊の大きな奴が取れると何うします」

「切つて町へ持つて行くだ、そして子熊はな負うて行くだよ」

「お爺さん、獵ではひどい目に逢つたこともありませうな」

「二度あるだ、一度はもう熊の穴へ這入つたんぢや、熊が外へ出てるもんぢやと思つて穴を塞ぎに行つたんぢや、そしたら突然にウーッと唸るぢやないか、一步二歩引き退つて身構へしやうとすると、野郎何時もなら逃げるんぢやが、此方が退さつたもんだで上りやがつて飛んで来たよ」

「何故また鐵砲を打たなかつたんですか」

「鐵砲は穴の前に置いて来たよ」

「其れから何うしましたか？」



と、二人は熱心に聴く、爺さんが黒猪けの顔は焚火の明りと、酒の  
カで赤黒く見える、グイと一杯引つけて、

「夫から己りや熊と相撲取つたど、その時頭と腕を咬まれたど、熊  
は外へ出ると己れを突つ放して失せやがつた、翌日足跡を附隨て打  
ツ殺して敵討したど」

「も一つののは？」

「も一つのはナ、己れと、も一人居たんぢや、其男は熊の穴へ遁入  
り、己りや前に番して居つた、所が野郎打ち損ねやがつたもンぢや  
から、熊奴怒りやがつて己れに飛び付いて肩を咬ぶり附くんぢや、  
丸太で叩き付けたらゴロリと倒れたよ」

「クラ猪と云ふのがゐますね」

「ナ、一番人間にビク／＼しとる、張合がねえや」と、  
又も茶碗でゴクリ／＼、

何時しか夜は更けた、凄い夏の月は穂高の峰に懸つた。

### ◎再遊の飛驒

飛驒の鹿間で自分は一先づ足をとどめた、鹿間と云ふは舟津町か  
ら半里程手前にある三井神岡鑛山のある所だ、日本に其鑛山があ  
るかなと知らぬ者共は首を傾げるかも知れないが、何うして何うし  
て流石は三井の金持ちの仕業だもの、其の規模の大なる、成程々々  
と頷かしめる。

着いた其の晩自分は、も一人の男と寢臺で寢た、所が寢臺で眠ると云ふのは實以て臍の緒切て始めてだ、佳い様なもの、悪い様なもの、嬉しい様な變な様なものである。寢臺は高さ二尺餘り、下は板の間である。「オイ、寢ようか」「ウム、何だか可笑しいな」實際相手の云ふ通り全く可笑しい。

夜は何時しか更けた、何んだ斯んだと難癖を付けて居つた隣の男も赤ん坊の様にスヤ／＼眠つてゐやがる、寢たナと思ひつゝ、自分も何時の間にやらウト／＼した。突然！凄しい大音響が耳元で爆發した、キヤツ！夜中に鑛山でダイナマイトの爆發かと、ハツと目を醒ますと、之はしたり！枕並べたる男の影も形も見えぬ、便所へで

も行つたのかと思つてると、板の間でウムと云ふ唸り聲が聞える、變だぞと起き上がつて見ると、「オー痛い」と、尻を擦り擦りしてゐる、「オイ、何うしたんだ？」と訊くと、「落ちたよ」と寢ぼけ聲を發してゐやがる、其の顔付きツたらない。思はず吹き出した。先生餘程眠たかつたんだらう、再びもぐり込んだ。

我輩こりや人事ぢやないと俄かに用心堅固にして眼を閉ぶつた。再び以前の靜閑に立ち返つた。自分は又もや夢路の人となつた。突然、バーン、ピシヤンと以前にも優さる大きな音がする、ハツと眼を開くと、大將今度は容易に起き得ない、切りに頭を擦つてヒーヒ云ふてゐる、「同情するよ」と云ふや否や僕は夜具を頭からトツ被つて

腹を抱へた、男は何たかガサ／＼音させてるから密つと夜具の際から覗くと、小言をブツ／＼並べながら一枚々々寢臺から夜具を板の間へ下して敷いて御座つたが、やがて又其中へもぐつた、大方寢臺は恐いものと夢にでも見てるだらう。

翌朝「小父ちゃん／＼」と僕を誘ひに来た子が居る、西村と云ふ醫者の愛兒政雄君だ。「ヤアおぢちゃん未だ寝てるの寢坊だなア」と吃驚する、「ねー起きよー、坊やと遊ばふよー」と、身體を揺する、「仕方のない兒だなア」と云つて遣ると、「だつて坊や獨りで淋しいものー」と全で戀人の様な口をさく。根が子供好きの僕だ、早速飛び起きて顔を洗ひに行くと、後から連れ立つて来てヂツと見詰め

てゐる、見れば見る程可愛い、見た。「今から御飯喰べるの？」と訊く、ウムと頷いて遣ると、「早く遊ばふよー」と確つかり帶を持つて離さない。飯もソコ／＼に済まして外へ出ると、「學校へ行かふよー」と云ひ出す、仰せの儘になると、ブランコに乗らうの體操を遣らうのとせがむ、「おぢさん閉口したよ」と思はず獨言すると、「閉口て何？」とくる、何んて無邪氣な子だらうと覺えず林檎の様な頬にキッスすると「おぢちゃん去年も僕の頬へた吸つたね」之には流石のおぢさんも降参した。

旨く欺まして學校を出ると、僕に瀛車を買つてくれの、ピストルを買つてくれの、自動車を買つてくれのと遠慮會釋もない、よしよ

しと願ひを納れると「吃度だよ、嘘付くの厭だよ」と念を押す、押される丈けおぢちやん信用が無いなア。

フイと思ひ附いて其の儘一里も絶頂にある前平へ行く氣に成つた、前平と云ふのは鑛石の採掘所から少し離れた所、合致してると云つても差支へ無い位。其の頂上で採掘した方鉛鑛、亞鉛鑛を巧みに鐵索で下部の鹿間まで送る、下部では俟つてましたと許り其れを受け亞鉛鑛は鑛石のまゝに、方鉛鑛は純鉛として富山へ積み出す、だから當日採掘した方鉛鑛は當日立派な鉛と成つてゐる、飛行機に似た箱は間斷なく空中を往來する、見てゐると面白い。

鹿間から其の前平まで道險阻では無いけれど兎に角山道だ、始め

は樹木が一本も無い禿山だ、漸々登り詰めると緑なす山を迎へる。自分は平地を歩くよりも山地を歩む方が痛快だ、だから險になれば成る程足が早く成る、餘程早く前平に着いた、一見して採鑛事務所に行つて、吉澤工學士に面會に行く、附手を頼む間も無く、其處に幸ひ見覚えのある吉澤君が立つてゐるから「吉澤君」と呼ぶ、勿論言葉を交はすのは今が始めてだ。

吉澤君は妙な顔をしてゐる、早速名刺を出すと、「やアよく來たね、まあ這入り給へ」と導く。

名を見て吉澤君も僕を知てると云ふ、吉澤君は今でこそ工學士神岡鑛山副取締役など、濟ましてゐるが、昔しは仲々以て〇高にゐた